

抵抗と革命をむすぶもの (1) — レバノン・ヒズブッラーの誕生 (1982～85年) —

末 近 浩 太

はじめに

1. 「アンブレラ組織」のトランスナショナル性
 - (1) 抵抗の原点——「9名委員会」
 - (2) トランスナショナルな成立背景
 2. 1980年代初頭の中東の政治変動——イラン革命とレバノン戦争
 - (1) イラン革命のインパクト
 - (2) レバノン戦争——抵抗か、停戦か
 3. ヒズブッラーの誕生
 - (1) イランによる「革命の輸出」
 - (2) 「殉教作戦」の開始
 - (3) ヒズブッラー指導部の出現
 - (4) シリアの介入——レバノン実効支配のプロトタイプ?
- むすびにかえて

はじめに——今日的関心としてのヒズブッラー誕生の過程

ヒズブッラー (Hizb Allāh, 神の党) は、1982 から 85 年にかけてのレバノン戦争の最中、北進してくるイスラエル国防軍 (Israeli Defense Forces, 以下 IDF) に対する武力による「抵抗 (muqāwama, resistance)」として結成された。しかし、当初から明確な命令・組織体系を持った単一の組織として誕生したのではなく、イスラエルによる侵略と占領に抗する様々な人々の「アンブレラ組織 (umbrella organization)」として段階的に形成されていった (Norton [1987: 99-106], Ranstorp [1997: 30-40], Hamzeh [2004: 22-26], Alagha [2006: 26-36], al-Kūrānī [1986: 187])。だが、抵抗を志すすべての者がヒズブッラーへと糾合したわけではない。

それは、ヒズブッラーが単なる抵抗としてだけでなく、同時に1979年にイランで成就したイスラーム革命を範とする、革命の「前衛」として誕生したためである。

抵抗組織か、それとも革命組織か——。ヒズブッラーの「正体」をめぐる評価は、国際政治の力学のなかで長らく二分されてきた。すなわち、米国は「国際テロ支援国家」であるイランによって支援される「国際テロ組織」という構図から、ヒズブッラーをレバノンにおけるイスラーム革命の「受け皿」との立場をとってきた。これに対して、(レバノンを含む)アラブ諸国を中心とした多くの国々がヒズブッラーを「レバノンの抵抗運動」と位置づけている。

このような認識の相違は、多くの問題群を含んでいる。例えば、「国際テロ組織」が、普遍宗教としてのイスラームを僭称することで、既存の国境線を自在に横断しグローバルな活動領域を確保しているのに対して、「レバノンの抵抗運動」と言った場合、その言動は不可避免的にナショナリズムに接続されることになる。そこには、イデオロギーとしてのイスラームを掲げた政治組織——イスラーム主義組織——が、国民国家体制にもとづく現代世界のなかでいかなる位相にある(あり得る)のかという、大きな課題が横たわる。また、度重なるヒズブッラーとイスラエルとの衝突を考えると、その原因をイスラームという宗教(あるいはイスラーム主義というイデオロギー)に求めるのか、それともヒズブッラーを取り巻く現実の政治に注目するのか、説明の方法にも相違が生まれることになろう。いずれにしても、抵抗と革命のはざまで錯綜するヒズブッラー評価は、冷戦終結後に隆盛した国民国家体制の将来をめぐる議論、そして9.11事件を機に顕在化した「テロとの戦い」と「イスラームの戦い」という二項対立的な言説のなかで、イデオロギーの問題としての色彩を強め、一層混乱の度合いを深めていった¹⁾。

ここで注目すべきは、ヒズブッラー自体も、抵抗と革命の関係をめぐっての立ち位置、政策、戦略、さらにはアイデンティティの揺らぎに直面してきたことである。それは、党旗に記された「レバノンにおけるイスラーム革命(al-Thawra al-Islāmīya fi Lubnān)」が1990年代半ば以降に「レバノンにおけるイスラーム抵抗(al-Muqāwama al-Islāmīya fi Lubnān)」に置き換えられたことに象徴される²⁾。ただし、これはヒズブッラーがイスラーム革命を放棄したことを意味するものではない。抵抗と革命は、ヒズブッラーがその誕生以来立脚してきた大原則であり、不可分のイデオロギー的な双柱である。したがって、ここですべき作業は、抵抗か革命かの二者択一ではなく、両者の関係を政治環境の変化に照らし合わせながら分析していくことであろう。ヒズブッラーの「正体」は、この作業のなかで像を結ぶことになる。そして、それは、ヒズブッラーを結節点とするレバノン、イラン、シリア、イスラエル、米国をアクターとする今日の中東政治を読み解くことに有意味なものになろう。

筆者は、これまで主に1990年代以降のヒズブッラーを論じてきた(Suechika [2000], 末近 [2002] [2003] [2006a] [2006b] [2007])。そこには、レバノン内戦の終結を契機として合法政党化

し、名実ともにレバノンの抵抗組織となった後のヒズブッラーの姿を見ることができる。また、1990年代半ば頃からは、学界の関心もこの彼らの「脱革命化」の過程に集まり、その説明を試みる研究が数多く出されることになった (Hamzeh [1993], Jaber [1997], Zisser [1997], Norton [1998])。合法政党化にともなう情報開示も追い風となり、この時期ヒズブッラーは研究 (可能な) 対象あるいは研究テーマとして確立されたのである。

しかし、1990年代以降の脱革命化の過程に注目が集まることで、それ以前の「前史」が研究テーマからこぼれ落ちていったことは否めない。無論、1980年代を通してある種の地下組織であったヒズブッラーの情報を得ることは容易ではないことから、「前史」に関しては同時期に書かれたインテリジェンス的な手法に基づくいくつかの研究 (例えば、Deeb [1986], Shapira [1988]) が繰り返し参照されているというのが実情である。だが、近年、ヒズブッラー自身が、わずかではあるが「前史」を語り始めている。また、1980年代のヒズブッラーに関する周知的な研究、例えば、1982年のイスラエルによるレバノン侵攻やイランとシリアの関係などの研究も進んでいる。このような研究条件の変化は、——筆者自身、自戒の念を込めて——看過されるべきではない。「前史」を再考することは、ヒズブッラーの「正体」を浮き彫りにするという今日的課題にとっても不可欠な作業であろう。

以上のような問題意識にしたがって、本稿では、ヒズブッラーが組織としてレバノンの地に誕生した時点まで遡り、抵抗と革命の関係を軸にその誕生の背景と過程を検討する。なぜ、いかにして、ヒズブッラーは誕生したのか。これが本稿の中心となる問いである。

1. 「アンブレラ組織」のトランスナショナル性

ヒズブッラーの結成年についての公式見解は発表されていない。1982年のレバノン戦争勃発を契機として、様々な政治勢力を段階的に糾合していった「アンブレラ組織」であったことを考慮すれば、それを特定することは困難であり、また、それほど意味のある作業ではない。だが、1つのターニングポイントとなったのは、最初のイデオロギー的綱領である「公開書簡(al-Risāla al-Maftūha)」を発表した1985年2月16日である。この時点において一定の組織化と意思統一が完了していたと考えるのが自然であろう。

だが、ヒズブッラーの前身となったイスラエルに対する抵抗の誕生については、1990年代半ば以降、指導層によってわずかずつではあるが語られてきた。抵抗の誕生は、同党の結成と同一視できないまでも、その過程を探ることで組織の形成過程を解明する糸口になると思われる。本節では、ヒズブッラー自身が語る抵抗の誕生と組織化についての言説を手がかりに、彼らの実像に迫ってみたい。

(1) 抵抗の原点——「9名委員会」

1980年代初頭のレバノンには、2つの大きな危機に瀕していた。

第1の危機は、1975年4月に始まったレバノン内戦である。武装化した政党や民兵組織が割拠し、武力衝突だけではなく一般市民をターゲットとした誘拐、暗殺、虐殺なども相次いだ。レバノンは政治的暴力の嵐が吹き荒れる「破綻国家 (failed state)」となっていたのである。内戦は、1990年10月の終結までの15年間に、13万から25万人もの死者と、100万を超える負傷者を生んだ凄惨なものであった。

第2の危機は、イスラエルによるレバノン南部地域への侵攻および占領である。1970年のヨルダンでの「黒い九月事件」以降、多くのパレスチナ難民がヨルダンからレバノンへと流入した。特にパレスチナ解放機構 (Munazzama al-Tahrīr al-Filasṭīniya, Palestine Liberation Organization, 以下 PLO) は、同国南部に「国家内国家」とも呼ばれた実効支配地域を確立し、対イスラエル武装闘争の拠点としていた。PLOによるレバノン領内からの越境攻撃を受けて、イスラエルは、1978年3月、PLOの軍事拠点の壊滅を目的とする軍事侵攻作戦「リータニー川作戦 (Operation Litani)」を発動した。7日間の戦闘で、IDFの死者は37人、一方、パレスチナ人とレバノン人については1100人以上が死亡し、その大半が一般市民であった。

イスラエルは、作戦停止後もレバノンからの無条件撤退を要求した国連安保理決議第425号 (S/RES/425 [1978]) を無視するかたちで、リータニー川以南のレバノン領に「安全保障地帯 (Security Zone)」という名の占領地を設置した。そして、傀儡の民兵組織「南レバノン軍 (Jaysh Lubnān al-Janūbī, South Lebanese Army, 以下 SLA)」を創設し、占領地の実効支配を託した。「安全保障地帯」は、レバノンの総面積約11%にもおよぶものであり、住民の大半を占めたシーア派は戦火あるいは占領を避けるかたちで移住を余儀なくされた (Hamizrachi [1988: 163-182], Smit [2000: 108-140])。

この2つの危機による「内憂外患」とも呼ぶべき事態に追い打ちをかけたのが、レバノン戦争——第3の危機——であった。1982年6月6日、イスラエルはレバノン領内のPLO武装勢力の掃討を目的に、「リータニー川作戦」を上回る大規模な軍事侵攻作戦である「ガリラヤの平和作戦 (Operation Peace of the Galilee)」を開始した。IDFは圧倒的な兵力でもって北進を続け、わずか1週間で首都ベイルートに到達し、市内に立てこもるPLO武装勢力に対して陸海空から容赦ない攻撃を加えた。PLOは8月21日に停戦に応じ、30日にはヤースィル・アラファート (Yāsir al-'Arafāt) 率いる指導部および主力部隊12000人が海路チュニジアへと脱出した。その直後、レバノンに残されるかたちとなったパレスチナ難民の安全保障のために、米仏伊による多国籍軍 (The Multinational Forces in Lebanon) が展開を開始したが、IDFはリータニー川以北を含むレバノンへの駐留を続けた。

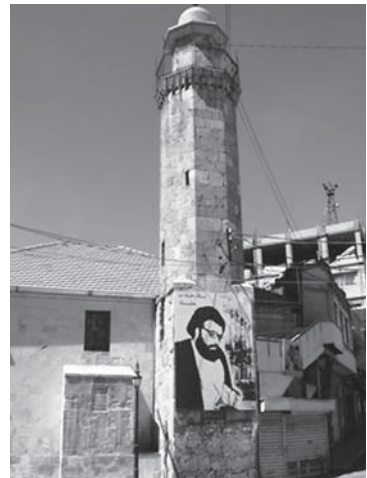
ヒズブラーの原点となった抵抗は、このような未曾有の危機、すなわちレバノン国家の破

綻とイスラエルによる侵攻と占領のなかで結成された。ヒズブッラーの現書記長 (al-amīn al-‘āmm, 1992年就任, 2009年10月現在5期目) ハサン・ナスルラー (Ḥasan Naṣr Allāh) によれば³⁾, イスラエルに対する抵抗は, レバノン戦争の開始直後である1982年7月, ベカーア高原のバアルベックにあるイマーム・マフディー・ムンタザル・ハウザ (Ḥawza al-Imām al-Mahdī al-Muntazar)⁴⁾に9名が結集することで組織されたとされる (図表1)。ナスルラーは述べる。

3つのグループが, すべての者たちを糾合するための1つの勢力, 1つの組織, 1つの枠組みをつくることに合意した。もちろん, 各グループがそれぞれ3名の同志を選出し, 代表させた。つまり, 全部で9名である。この9名が最初のシューラー会議 (majlis al-shūrā) を結成した。彼らは会合を開き, 基本となる諸原則について合意をした。しかし, 結局のところ, 遠大な政治計画についての議論, レバノンの国内情勢についての議論は必要がなかった。時は1982年, [イスラエルによる] 6月侵攻のわずか数週間後だったからである。最重要課題は, 占領に対峙することであった。人びとは, 「レバノンがついにイスラエルの時代へと突入した, 出口の見えない長く暗いトンネルへと入ってしまった」などと嘆いていた。出口のないイスラエルの時代をあたかも受け入れたかのような行動をとり始めた勢力すら存在した。しかし, 最大の課題は占領に対峙することであり, また, 最後には敵を打ち破ることができる効果的, 継続的, そして高い士気を持った抵抗を結成し開始することであった。これこそが, それらの3つのグループが参集した最大の目的である (NBN [2003])。

この9名によって組織化された最初の抵抗は, 「9名委員会 (Lajna al-Tis'a)」と呼ばれた。そして, そのメンバーを選出した3つのグループとは, ①「イスラーム・アマル運動 (Ḥaraka Amal al-Islāmī)」, ②「レバノン・イスラーム・ダアワ党 (Ḥizb al-Da'wa al-Islāmī fī Lubnān)」および「ムスリム学生のためのレバノン連合 (al-Ittiḥād al-Lubnānī li-l-Ṭalaba al-Muslimīn)」, ③「レバノン・ムスリム・ウラマー連合 (Tajammu' al-'Ulamā al-Muslimīn fī Lubnān)」であった (NBN [2003], Mustafā [2003: 433], Sankari [2005: 198], Qāsim [2008: 26])⁵⁾。

ここで注意すべき点は, IDFの侵攻に抵抗したのは,



図表1 イマーム・マフディー・ムンタザル・ハウザ (バアルベック)

(出所) 筆者撮影 (2009年6月)。中央のポートレートは, 設立者のアッバース・ムーサウィー。

「9名委員会」だけではなかったということである。なかでも、レバノン国内の左派勢力(ワリード・ジュンブラト (Walīd Jumblāt) 率いる「進歩社会党 (al-Ḥizb al-Taqaaddumī al-Ishtirākī)」や「レバノン共産主義行動組織 (Munazzama al-'Amal al-Shuyū'ī fi Lubnān)」など)を中心に、「アマル運動 (Ḥaraka Amal)」, イスラーム主義組織, パレスチナ諸組織などによる「レバノン国民抵抗戦線 (Jabha al-Muqāwama al-Waṭaniya al-Lubnāniya)」が組織され⁶⁾, IDF や SLA との激しい戦闘を繰り返した (al-Iliyās ed. [2006a: vol. 2, 64-119])。

「アンブレラ組織」としての「9名委員会」の特徴は、イラン型のイスラーム革命への共鳴, 特にルーホッラー・ムーサヴィー・ホメイニー (Rūh Allāh Mūsavī Khomeynī) への忠誠に裏付けられたイスラエルに対する抵抗の意義について, 思想の共有がなされていたことである。ヒズブッラーの現副書記長ナイーム・カースィム (Na'im Qāsim) は, その著書『ヒズブッラー——その方針・実践・未来 (Ḥizb Allāh: al-Manhaj, al-Tajriba, al-Mustaqbal)』において⁷⁾, 「9名委員会」が「9名文書 (Wathīqa al-Tis'a)」と呼ばれた政治綱領を採択したと述べている。そこに記された同委員会の目標は, イスラエルによる侵攻と占領に対する抵抗だけでなく, レバノンにおける統一された組織的なイスラーム運動の設立, シヤリーア (イスラーム法) に基づいた社会運営, 「法学者の統治 (velāyat-e faqīf)」論の実践, そしてホメイニーへの忠誠であった。これらの目標に基づき, 打倒すべき敵はイスラエルだけではなく, イスラエルとの同盟関係にあるアミン・ジュマイイル (Amīn al-Jumayyil) 大統領と, それを支援する西側諸国による多国籍軍も同様とされた (Faḍl Allāh [1994: 33], Mustafā [2003: 434-435], Qāsim [2008: 25-26])。

ここであらかじめ断っておくと, この「9名委員会」のメンバーが誰であったかは公表されておらず, 現段階では全員を特定することはできない。3つのグループについても, 実際にはメンバーシップが重複しており, 同委員会のメンバーがいずれを出身としていたか解釈の余地が残る。しかし, 後のヒズブッラーの指導者・幹部となる次の3人がそれぞれのグループを代表していたと言われている。すなわち, ①のイスラーム・アマル運動がフサイン・ムーサウィー (Ḥusayn al-Mūsawī), ②のレバノン・イスラーム・ダアワ党およびムスリム学生のためのレバノン連合がスブヒー・トゥフアイリー (Ṣubḥī al-Ṭufaylī, ヒズブッラー初代書記長), ③のレバノン・ムスリム・ウラマー連合がアッバース・ムーサウィー ('Abbās al-Mūsawī, 同第2代書記長) によって, それぞれ代表されていた (Shapira [1988: 124], NBN [2003])。「9名委員会」の実像については, 以下で論じていくようなその結成からヒズブッラー指導部の誕生までの過程を追うことで, 推し量ることは許されよう。そのためにも, キーパーソンとなるこの3人の名を覚えておきたい。

(2) トランスナショナルな成立背景

ヒズブッラーの原点となった「9名委員会」と、レバノンにおける他の抵抗を分けたのは、イラン革命への共鳴姿勢であった。しかし、多くの研究者が指摘してきたように（例えば、Ranstorp [1997: 25], Hamzeh [2004: 19-26], Chehabi [2006: 226]）、ヒズブッラーが単純にイランによって創造されたとする見方は正鵠を射ていない。

その理由は2つある。1つは、1979年のイラン革命以前の段階において、既にレバノンのシーア派による政治的動員は大きな成功を収めており、「9名委員会」に糾合したグループを含む、いくつかの政治組織が誕生していたことである。もう1つは、同委員会が、レバノンとイランのバイラテラルな（従属）関係などではなく、中東地域に広がるトランスナショナルなシーア派の人的ネットワークを背景に生まれたことである。つまり、「9名委員会」の結成の背景を理解するには、1982年のレバノンという時空間から、時間と空間の両面において分析の視野を広げていかななくてはならない。

レバノンにおける「シーア派」の政治的動員

まず、レバノンで時間を遡ってみたい。レバノンでは、1974年、シーア派住民による社会運動「奪われた者たちの運動 (Ḥaraka al-Mahrūmīn)」が、イラン出身のウラマー（‘ulamā’, イスラーム法学者）、ムーサー・サドル (Mūsā al-Ṣadr) らによって結成された。同運動の起源と史的展開については、既にF・アジャミーやA・R・ノートンらによる優れた研究が存在するのでここでは詳述を控えるが (Ajami [1986], Norton [1987], Halawi [1992], al-Iliyās ed. [2006b: vol. 1, 2]), 端的に言えば、1960年代から70年代にかけてレバノンの「宗派主義体制 (al-ḥukm al-tā’ifī)」のなかで不遇な地位にあったシーア派住民の利権拡大を訴える社会運動として生まれ、発展した⁸⁾。

この場合の「シーア派」とは、レバノンの法制度によって社会的に定められた社会集団、つまり客観的な構成物であり（信仰とは関係なく、実際に身分証明書に「シーア派」と記される）、宗教としてのシーア派イスラームへの信仰の有無や強弱によって主観的に決められたものではない。そのため、「奪われた者たちの運動」は、その理念をムーサー・サドルのイスラーム法学に依拠していたものの、宗教運動ではなく世俗主義的傾向を有する政治運動として見られることが多かった。

この奪われた者たちの運動には、レバノン内戦勃発の直後となる1975年7月に軍事部門「アマル (Afwāj al-Muqāwama fī Lubnān, レバノン抵抗大隊)」が設立され、後にそれが同運動の正式名称——アマル運動——となった⁹⁾。このアマル運動から、「9名委員会」を構成する第1のグループ、フサイン・ムーサウィー率いるイスラーム・アマル運動という名の分派が生まれ、また、後のヒズブッラーに人材を輩出することになる。

ナジャフ学派と「シーア派インターナショナル」

次に、レバノンから空間を広げてみたい。「9名委員会」および後のヒズブッラーの指導部に加わった者たちの多くが、1960年代から70年代にかけてイラク南部の都市ナジャフへの留学経験を持っていた。ナジャフはイランのコム、カルバラーやマシュハドとならぶシーア派イスラームにおける学問の中心地であり、イラク国内だけではなく、イランやレバノン、その他のアラブ諸国からの多くの留学生を抱えていた。C・マッラートは、ナジャフを中心としたフランスナショナルな学問的・人的ネットワークを、「シーア派インターナショナル」と呼んでいる (Mallat [1993: 45-46])。

この場合のシーア派とは、前述のレバノンの法制度によってつくられた、レバノン国内に限定された客観的な社会的指標ではなく、国籍や民族の違いに関わりない、信仰に基づいた主観的なものと言える。したがって、ナジャフを同窓とする者たちにとって、出身地の違いを超えて個人的な親交を深めることは「自然なこと」(Ranstorp [1997: 26])であった。

1960年代から70年代のナジャフでは、「イスラーム・ダアワ党 (Hizb al-Da'wa al-Islāmīya, 1957年結成)」が党員を急速に拡大していた¹⁰⁾。イラクでは1958年に共和革命が起り、世俗主義に立脚したアラブ民族主義政権が誕生していた。社会の世俗化が急速に信仰するなかで、イスラーム・ダアワ党はイスラーム法に基づいた統治と社会の運営、すなわちイスラーム国家の樹立の必要性を掲げ、やがて世俗主義政権に対する反体制派としての性格を強め、「アラブ社会主義バース党 (Hizb al-Ba'th al-'Arabi al-Ishtirākī, 以下バース党)」政権との対立の色を深めていった。

イスラーム・ダアワ党の特徴は、政治組織でありながらハウザ (ḥawza) と呼ばれるイスラーム法学の学界と緊密な関係を築き、当時台頭してきたウラマーの政治への積極的関与を是とする「革新派」の思想と連動していたことにある (山尾 [2006])。したがって、留学生たちのなかからは、学問を通してイスラーム国家の樹立と「革新派」の思想の薫陶を受けると同時に、同党の党員として政治活動にたずさわる者が多数現れた。このイスラーム・ダアワ党から派生したレバノン支部が、後の「9名委員会」に参加した第2のグループ、レバノン・イスラーム・ダアワ党であった。その主導的な役割を担った1人が、後にヒズブッラーの初代書記長となるトゥファイリーである¹¹⁾。

ここで注目すべきは、ホメイニーもこのナジャフで14年間の亡命生活を送り、独自の革命思想を紡ぎ出していったことである。1969年から70年にかけてそこで行われた一連の講義は、後に『イスラーム統治体制——法学者の監督 (*Hokūmat-e Eslāmī: Velayāt-e faqīh*)』(邦訳はホメイニー [2003]に収録)として刊行され、イランのイスラーム共和制樹立の思想的なバックボーンとなった。この時点で既にホメイニーがシーア派宗教界において名声を馳せていたことを考慮すれば (Mallat [1988: 13])、ナジャフにおいてレバノンからの留学生がホメイニーの

講義に参加し、あるいはそうでなくともその思想に触れる機会があったことは想像に難くない。その意味において、レバノンのシーア派はイラン革命以前からホメイニーの思想の影響を受けていたことになる（付け加えるならば、レバノン南部のジャバル・アーミル地域は、16世紀のサファヴィー朝の時代から文化的・宗教的なイランとの関係を有してきた（Chalabi [2006: 11-16], Mallat [1988: 3-9]）。

このように、イラク、イラン、レバノンの三国にまたがるシーア派のネットワーク——シーア派インターナショナル——のなかで、後のヒズブッラーの結成メンバーは独自の思想と人的なつながりを涵養していったのである（図表2）。

図表2 ヒズブッラーの結成メンバーと「シーア派インターナショナル」

氏名	留学先・最終学歴	備考
スブヒー・トゥファイリー Ṣubḥī al-Tufaylī (1948年～)	ナジャフ (1965～74年) コム (1976～78年)	ヒズブッラー初代書記長 (1989～1991年) ナジャフではバーキル・サドルに師事 コムではカーズィム・ハーイリー (Kāzīm al-Hā'irī) に師事
アッバース・ムサウィー 'Abbās al-Mūsawī (1952年～)	ナジャフ (1970～78年)	ヒズブッラー第2代書記長 (1991～92年) ナジャフではバーキル・サドルに師事
ハサン・ナスルッラー Hasan Naṣr Allāh (1960年～)	ナジャフ (1976～78年) バアルベック (1978～??年) コム (1986年)	ヒズブッラー第3代書記長 (1992年～現在) ナジャフではバーキル・サドルに師事 バアルベックではアッバース・ムサウィーに師事
フサイン・ムサウィー Ḥusayn al-Mūsawī (1943年～)	バイルート・アラブ大学卒 (アラビア語学) (19??年)	アマル運動初代副代表・執行部部长 イスラーム・アマル運動指導者 (1982年)
イブラーヒーム・アミン・サイイド Ibrāhīm al-Amīn al-Sayyid (1953年～)	ナジャフ (19??年) コム (19??年)	ヒズブッラー政治会議議長 (19??年～現在) ナジャフではバーキル・サドルに師事
ナイーム・カースィム Na'im Qāsim (1953年～)	レバノン大学教育学部フランス語学科卒 (1977年)	ヒズブッラー副書記長 (1991年～現在)
ラーギブ・ハルブ Rāghib Ḥarb (1952～84年)	ナジャフ (1970～74年) バイルート (1974～??年)	イスラーム抵抗指導者 (1983～84年) ナジャフではバーキル・サドルに師事 バイルートではフサイン・ファドルッラーに師事

(出所) *al-Nahār*, *al-Safir*, *al-Sharq al-Awsaṭ*, *al-Waṭan al-'Arabī*, *al-'Ahd*, *al-Intiqād* などの報道資料, Markaz al-'Arabī li-l-Ma'lūmāt – al-Safir [2006b: vol. 3], al-Ḥusaynī [1986], Mallat [1988], Shapira [1988], Sharāra [2006], および筆者によるヒズブッラー広報局での聞き取り調査に基づき、筆者作成。

2. 1980年代初頭の中東の政治変動——イラン革命とレバノン戦争

「9名委員会」の背後には、イラク、イラン、レバノンにまたがるシーア派のトランスナショナルな人的・思想的ネットワークが存在した。そうだとすれば、なぜそれほど広大なネットワークがわずか9名の小さな組織に結晶したのだろうか。この問いに対する1つの答えは、イラン型のイスラーム革命への共鳴およびそれに基づくイスラエルによる侵攻・占領に対する徹底抵抗という、同委員会が共通項としていた思想的側面に求めることもできよう。しかし、本節では、むしろ「アンブレラ組織」へと糾合していった様々な組織の動静の分析に軸足を置き、この問題を考えてみたい。なぜならば、1980年代初頭の中東政治が大きな変動のなかにあり、それを抜きにして彼らの動静を語ることはできないからである。その変動の象徴がイラン革命(とそれにとまなうイラン・イラク戦争)とレバノン戦争である。

(1) イラン革命のインパクト

1979年のイランでのイスラーム革命の成功は、それまで世俗化が進むと思われていた現代世界に対して大きな衝撃を与える世界史的な事件であった。イスラーム教徒にとっては、宗教感情を高揚させ、政治意識を覚醒させる契機となり、中東地域の各地で革命の成功を祝福する声が上がった。なかでも、内戦による混乱、イスラエルによる侵攻・占領、そして西洋的近代化の「優等生」として脱イスラーム化が急速に進行していたレバノンにおいては、宗教的価値観に基づいた政治変革を果たしたホメイニーへの傾倒者が続々と生まれる土壌が存在していた。とりわけ、レバノンの宗派主義体制のなかで不遇な地位にあった「シーア派」が、同じシーア派によるイランでのイスラーム革命の成功に希望を見いだしたことは、不思議ではない。

ホメイニーへの忠誠を共通項とする「9名委員会」の結成の背景には、このようなイラン革命の思想的インパクトがあったことに疑いはないだろう。しかし、ここではもう少し客観的な説明を試みてみたい。すなわち、イラン革命の政治的インパクトに注目し、レバノンとイラクの両国を軸にした中東政治のなかでの政治勢力間の関係やパワーバランスの変容から、同委員会の組織化の過程を分析する試みである。

レバノン——イラン革命政府とアマル運動との関係

1970年代末のレバノンでは、社会的地位としての「シーア派」の代弁者としてアマル運動が勢力を拡大していた。しかし、このことはアマル運動が「シーア派」を共通項とただけのいわば寄り合い所帯であったことを意味した(Norton [1987: 74])。強固なイデオロギー的な統一性に欠けていた同運動は、やがて、その内部にイデオロギーとアイデンティティの問題を抱えることになる。それは、ウラマーであったムサー・サドルのリビアでの「謎の失踪」以降、

米国で学んだ弁護士であり（つまり思想家ではない）ナビーフ・ビッリー（Nabīh Birrī）が代表に就任したことに象徴されている。以後、アマル運動はイスラームやシーア派に関わる思想的展開を見せず、レバノンにおける「シーア派」の利権拡大のみを強調していくことになった。

しかし、アマル運動がイランでのイスラーム革命に無関心であったかという点、そうではない。むしろ現実とは逆であり、革命の準備に大きな貢献をしたことが知られている¹²⁾。同運動は、パフラヴィー朝下の反体制派であり、後のイラン革命暫定政府の中核を担った「イラン自由運動（Nahzat-e Āzādī-ye Irān, 1961年結成）の活動家とレバノン南部地域で軍事訓練をともにし¹³⁾、また、1979年初頭には戦闘員約500名を革命前夜のイランへと派遣している¹⁴⁾。ところが、同年11月の革命暫定政府内におけるイスラーム共和党派による権力掌握と、それに伴うイラン自由運動のメンバーの「肅正」の結果、イラン革命政府とアマル運動との関係は冷却の一途をたどり、1981年末までには修復不能なまでに悪化した（Chehabi [2006: 209]）。

他方、アマル運動の指導部の側も、1980年代初頭の中東の国際関係をめぐって、イランとのあいだにいくつかの問題を抱えていた。第1は、イランがリビアに対してムサー・サドルの「謎の失踪」に関する調査の要求を躊躇したことである。革命直後のイランにとっては、リビアは反米および対イスラエル強硬路線を共にする数少ない同盟国であったためである。第2に、イランがレバノン南部地域を拠点としていたPLOの解放闘争に対する支持を表明していたことである。アマル運動の指導部は、レバノンの安全保障、特に南部地域のシーア派住民の保護を優先していたが、イランはイスラーム革命思想に基づき IDF との対決姿勢を打ち出していた。第3に、これにともない、イラン革命政府がレバノンへの「革命防衛隊（Sepāh-e Pasdarān-e Enqelāb-e Eslāmī）」の派遣を決定したことであった。あくまでもレバノンの「シーア派」の利権拡大を目的としたアマル運動にとって、こうしたイランの言動は「内政干渉」として捉えられたのである（Shaery-Eisenlohr [2008: 105]）。

このようなイラン革命政府とアマル運動の指導部との関係の悪化は、もともと「シーア派」の寄り合い所帯であったアマル運動の求心力を低下させる結果となった。すなわち、イラン革命に共鳴した者たちは、その信仰と実践の場をアマル運動内に見いだすことが困難になっていったのである。

イラク——イスラーム・ダアワ党への弾圧

一方、イラクでは、イランでのイスラーム革命の成功が、世俗主義政権に対する反体制派としてのイスラーム・ダアワ党に正負の両面で政治的インパクトを与えることになった。

正の面としては、レバノンと同様にシーア派に宗教意識の高揚と政治意識の覚醒をもたらし、イスラームに基づいた政治変革の気運の高まりを生んだが、それだけではなく、イランによる

「革命の輸出」戦略の一環として、実際に物理的な援助を受けることになったことが指摘できる。事実、同党は革命後に本部をテヘランに移転している。だが、イラン革命政府に支えられたイスラーム・ダアワ党の勢力拡大は、イラクのバアス党、サッダーム・フサイン (Saddām Ḥusayn) 政権によるシーア派宗教界に対する大弾圧という負の結果をもたらした。1980年3月には、イスラーム・ダアワ党員および関係者を死刑とする法案が可決され、指導者バーキル・サドルを含む多くのメンバーが逮捕・処刑されている。バーキルというカリスマを失ったイスラーム・ダアワ党は、組織の求心力低下に直面することになった (Robins [1990: 84-88])。

この正負の側面のどちらをより重視するかについては、当事者のみならず、観察者によっても見解の分かれるところであろう。しかし、確実なことは、やがて始まったイラン・イラク戦争が、この正負のコントラストを一層濃いものに変えていったということである。1980年9月22日のイラク軍のイラン侵攻によって開始されたこの戦争は、イラン革命政府とイスラーム・ダアワ党の関係の緊密化を後押しすることになった。同党にとっては、この戦争はイラン革命政府とともにフサイン政権を打倒するチャンスであった。しかし同時に、反体制派としてフサイン政権に対峙するだけでなく、イラン領内を拠点に祖国と戦火を交えるという、厳しい現実には直面することになったのである (Jabar [2003: 253-254])。

姿を消した2人のサドル——レバノン・イスラーム・ダアワ党の勢力拡大

以上のように、イラン革命政府との関係を見た場合、レバノンのアマル運動は疎遠に、イラクのイスラーム・ダアワ党は緊密になっていき、逆の過程を辿ることになったと言える。にもかかわらず、両者はこの時期、かつてないほど相互に影響を与えることになる。以下では両者の関係を見てみたい。

イラン革命およびイラン・イラク戦争の結果、フサイン政権にとっての脅威と化したイスラーム・ダアワ党は、バアス党政権による大弾圧の末にカリスマ的指導者バーキル・サドルを失っただけではなく、イラク国内での活動がほぼ不可能となった。ナジャフで同党の活動にたずさわっていたレバノンからの留学生たちは、イラク当局により国外追放されるか、帰国を余儀なくされることになる。帰国した彼らは、レバノンにおいて同名の組織——レバノン・イスラーム・ダアワ党 (1970年代初頭に結成)——に参集したが、それは「十分に機能できる政党というよりも、活動家による運動」に過ぎず (Shanahan [2005: 167])、むしろ、「ムスリム学生のためのレバノン連合 (1966年設立)」と呼ばれたモスクや学校などのシンパのサークルを緩やかに結ぶものとして存在していた (Sharāra [2007: 87, 91])。また、1980年のイラクでのバーキル・サドルの処刑を機に、レバノンにおける同党は事実上の活動停止に陥り、メンバーの多くは現実に目に見える政治力を有したアマル運動に籍を置くことになった (Ranstorp [1997: 28])。

しかし、先に触れたように、アマル運動は、「シーア派」を共通項とした「構造的に広い基盤を有した緩やかな組織」(Ranstorp [1997: 3])であったため、様々なメンバーを受け入れることができた反面、構成員の変化に対して敏感かつ脆弱であり、組織としての一体性の維持が常に課題となっていた。そしてこの課題は、1978年のムーサー・サドルの「謎の失踪」の結果、より大きなものとなった。とりわけイスラーム国家の樹立を是とするイスラーム・ダアワ党出身のメンバーたちは、イラン革命の成功を追い風にアマル運動指導部のナショナリスティックな方針に反発していった。その筆頭が後の初代書記長トゥファイリーと、第3代(現)書記長ナスルラーであり、指導部の世俗主義的な姿勢を厳しく批判したという(al-Husaynī [1986: 18], Ranstorp [1997: 30], Markaz al-'Arabī li-l-Ma'lūmāt – al-Safir [2006a: vol. 3, 38-9])¹⁵⁾。アマル運動の分裂はもはや時間の問題であった。

(2) レバノン戦争——抵抗か、停戦か

1982年6月、中東最強を誇るIDFによるレバノン侵攻への対応をめぐって、国内の政治勢力は二分された。それは、抵抗(徹底抗戦)と停戦(交渉または降伏)の2つであり、それぞれ6月中に具体的な動きが生じた(Smit [2000: 157-166])。

イランの「参戦」——レバノン・ムスリム・ウラマー連合の結成

「抵抗派」については、前述のレバノン国民抵抗戦線の他に、イラン革命政府が、レバノンのシーア派とスンナ派を糾合し徹底抗戦するための組織として、レバノン・ムスリム・ウラマー連合をIDF包囲下のベイルートに創設した。これは、レバノン戦争勃発時にテヘランを訪問中であったレバノンの使節団からの支援要請に対して¹⁶⁾、イラン革命政府が応えたものであった(Khājim [n.d.], Sankari [2005: 194])。ここに、「9名委員会」にメンバーを輩出した第3のグループが誕生する。

レバノン・ムスリム・ウラマー連合は、ベカーア高原出身のシーア派であるズハイル・カンジュ(Zuhayr al-Kanj)とレバノン南部の都市サイダー出身のスンナ派であるマーヒル・ハンムード(Māhir Hammūd)の2人を中心に結成された(Shapira [1988: 126])。その理念は、次の2つに集約できる。第1に、イスラーム革命を成就させたイランを範とし、シーア派とスンナ派の違いを超えた「イスラーム統一(al-wahda al-Islāmiya)」を目指すこと、第2に、イスラエルによるレバノン侵攻を含む、イスラーム世界におけるすべての紛争と抑圧を排除することであった(Khājim [n.d.])¹⁷⁾。この組織は、イラン革命への支持とイスラエルの侵略に対する抵抗を共有するウラマーたちを「緩やかに糾合したもの」(Sankari [2005: 196])であり、レバノンの各地域に形成されたグループの集合体であった(Faḍl Allāh [1998: 91-92])。そのため、メンバーシップについては、「当時における個人、集団、党派を含む、独立したすべての

イスラームの実践者たちであり、彼らすべてがアッラーへの隷従のための廉直と善行に基づいた真摯な協調を行う」(Khājim [n.d.]) といったいわば最大公約数的な表現にとどめられていた。レバノン・ムスリム・ウラマー連合は、ヒズブッラーの誕生以降も独立した組織として今日まで存続しているため、ヒズブッラーに糾合したのはそのメンバーの一部であったと考えられる。同連合のなかでも、特にベカーア高原を拠点とするアッバース・ムーサウィーらの派閥が、「9名委員会」に3名メンバーを選出している (NBN [2003], Qāsim [2008: 26])¹⁸⁾。

他方、「停戦派」は、イリヤース・サルキース (Iliyās Sarkīs) 大統領の主導による「救国委員会 (Hay'a al-Inqādh al-Waṭanī, National Salvation Committee)」に糾合していった¹⁹⁾。これはロナルド・レーガン (Ronald Reagan) 米政権の仲介のもと、外交を通してイスラエルとの停戦交渉によって事態の解決を目指すものであった。元来より PLO の対イスラエル闘争を無謀な冒険主義であると批判していたアマル運動の指導部は、6月20日、ビッリー書記長の指導のもと救国委員会に参加することを決定した。ビッリー代表は、PLO などのパレスチナ人武装勢力とともに IDF に対する抵抗を続けていた一部のアマル運動のメンバーに対して、武器を置き、戦闘を停止するように命令した (Smit [2000: 149])。

アマル運動の分裂——イスラーム・アマル運動の結成

このことがアマル運動内に分派を生み出すことになった。寄り合い所帯としてのアマル運動のなかには、IDF に対する徹底抗戦を望む者も多く、指導部に反旗を翻していった。7月には同運動のテヘラン代表であり広報官であったイブラーヒーム・アミン・サイイド (Ibrāhīm Amīn al-Sayyid) が職を辞し、また、副書記長であったフサイン・ムーサウィーはビッリー代表を批判したことから指導部を追放された²⁰⁾。この際、500名余りのメンバーが運動から追放または離反したとされる。そして、彼らの一部は、ベカーア高原でフサイン・ムーサウィーの指導の下でイスラーム・アマル運動という新たな組織——「9名委員会」を構成する第1のグループ——を結成した (Norton [1987: 88], Sankari [2005: 197])。

ここで強調しておきたいのが、この分派はレバノン戦争への対応をめぐる単なる方法論的な違いによってもたらされたのではなく、思想面での相違に基づいたものでもあったことである。フサイン・ムーサウィーは、「我々の目的は、真実と公正の統治であるマフディーの統治をこの地上に打ち立てることであり、イランは我々の靈性の源であり、我々の権威である」と述べるなど、イランを範としたイスラーム国家の樹立を訴えていた (Markaz al-'Arabī li-l-Ma'lūmāt - al-Safir [2006b: vol. 3, 177-178])。このことは、何よりもイスラーム・アマル運動という名称から看取できる。新運動の設立に賛同した者たちにとっては、アマル運動の指導部によるイスラエルとの停戦の選択は、政治的な妥協というだけではなく反イスラーム的行為であると見なされた。そこで、ムサー・サドルの「謎の失踪」によって失われてしまったイスラーム的価

値観を取り戻すべく、「真性な」アマル運動を結成したのである。そのため、この分派には必然的にアマル運動のなかのイスラーム主義者たち、とりわけレバノン・イスラーム・ダアワ党出身者が多く賛同することになった (Deeb [1986: 12], Ranstorp [1997: 30], Smit [2000: 170], Markaz al-'Arabī li-l-Ma'lūmāt – al-Safīr [2006b: vol. 3, 38])。

ただし、アマル運動の指導部がイスラーム的価値の実現の放棄や世俗主義の採用を公式に表明したことはない (cf. Shanahan [2005: 109])²¹⁾。同運動の基本的立場を示した文書「アマル憲章 (Mithāq Amal)」には、アマル運動が「国民的運動 (ḥaraka waṭanīya)」であることが記されているものの、まず冒頭に「アッラーおよびその真の意味への信仰から誕生した運動」との規定が明示されており、全編に渡ってクルアーンとハディースの引用が散りばめられている (al-Iliyās ed. [2006b: vol. 2, 96-131])。その意味では、イスラーム国家の樹立を謳っていないという点において、イラン型の革命的イスラーム主義とは一線を画すが、それゆえに直ちに世俗主義であると評価することには留保が必要である²²⁾。

いずれにせよ、分派に賛同した者たちからすれば、アマル運動本体はあるべきイスラームから遊離した存在に見えたのであろう。そしてその対極——つまりイスラーム的に正しいあり方——の象徴が、イスラーム革命を成功させたイランであった。実際、分派直後の8月にはダマスカスにおいて駐シリア・イラン大使アリー・アクバル・モフタシェミー (‘Alī Akbar Mohtashemī) とイスラーム・アマル運動のメンバーが会合を開き、政治的な立場と今後の方針についての共通認識の確認をしており、軍事面および資金面での支援が取り決められた (Chehabi [2006: 217], Markaz al-'Arabī li-l-Ma'lūmāt – al-Safīr [2006a: vol. 3, 175-176])²³⁾。

以上見てきたように、イラン革命に端を発した1980年代初頭の中東の政治変動は、イラクとレバノンだけではなく、イスラエル／パレスチナ (パレスチナ問題) やリビアをも巻き込むかたちで、本来思想的・イデオロギー的には共鳴要素の乏しいレバノンのアマル運動とイラクのイスラーム・ダアワ党のメンバーを邂逅させ、また、それぞれの組織の内部に変化をもたらした。「アンブレラ組織」としての「9名委員会」の結成は、こうして導かれていったのである。

3. ヒズブッラーの誕生

1982年7月に結成された「9名委員会」は、いかにしてヒズブッラーへと発展していったのか。本節では、ヒズブッラー指導部による言説を基本軸に、イランとシリアの役割に触れながら考察してみたい。

(1) イランによる「革命の輸出」

まず、ヒズブッラー指導部が自らその歴史を綴った書、『もう1つの選択——ヒズブッラー

の歴史と立場 (*al-Khiyār al-Ākhir: Hizb Allāh al-Sira al-Dhātiya wa al-Mawqif*)』(Faḍl Allāh [1994]) を取り上げてみたい。著者のハサン・ファドルッラー (Hasan Faḍl Allāh) は、1967年生まれ、現在レバノンの国民議会議員(2005年初出馬・当選、2009年再選)であり、ヒズブッラーの幹部の1人である。同書によれば、「9名委員会」は、1982年の後半に5名から成る「レバノン・シューラー (Shūrā Lubnān)」という名の新たな組織に改編された²⁴⁾。その後、メンバーの数は7名へと拡充され、1984年に最初のヒズブッラー指導部がつくられたとされる (Faḍl Allāh [1994: 35])。

この組織の改編においては、イラン革命政府が主導的な役割を担った。そして、それはレバノンの内と外の2つの側面から双方向的に実践された。まず、内からは、レバノン国内における「同盟者」の組織化である。前述のように、レバノン戦争開始直後の1982年6月に、テヘランを訪問中のレバノン使節団がイラン革命政府に支援要請を行い、時を待たずしてレバノン・ムスリム・ウラマー連合がベイルートに設立されている。次に、外からについては、レバノンへのイラン人の派遣である。レバノン戦争開戦直後の7月の段階で、イラン革命政府は革命防衛隊、少なくとも800名をレバノンへ派遣し²⁵⁾、フサイン・ムーサウィーのイスラーム・アマル運動と、バアルベックのハウザの教師でありレバノン・ムスリム・ウラマー連合の活動にたずさわっていたアッバース・ムーサウィーら約180名に対して軍事訓練を開始していた (Faḍl Allāh [1994: 12-16], Ranstorp [1997: 33], Chehabi [2006: 217], Qāsim [2008: 94-95])。このアッバース・ムーサウィーこそ、「9名委員会」結成の場所であるイマーム・マフディー・ムンタザル・ハウザを設立した人物である²⁶⁾。

革命防衛隊は、レバノン南部地域やベイルートにおける IDF との直接的な戦闘には参加せず、ベカーア高原を拠点にして「革命の輸出」戦略の実働部隊である「解放運動局 (Vāhed-e Nehzathā-ye Āzādībakhsh)」²⁷⁾の活動を通じた、イスラーム革命の思想に基づいた教育や訓練、宣伝に重きを置いていた。レバノン国軍との衝突を繰り返しながらも、豊富な資金を駆使して訓練キャンプ、学校、診療所、病院を設置し、親イラン勢力の動員に努めていった (Ranstorp [1997: 35-36])。イラン革命政府にとって、内戦によって政治的真空が生じていたレバノンは「革命の輸出」の試金石となる国家であった。しかし、革命の「受け皿」になり得たレバノン・イスラーム・ダアワ党は事実上活動を停止しており、また、前述のようにアマル運動指導部との関係は冷却していたため、イラン人の直接派遣を通じた新たな組織の設立を必要としていたのである²⁸⁾。

現副書記長カースィムは、この時期、大小様々なイスラーム主義組織や運動が「9名文書」に掲げられた理念に賛同し、「9名委員会」に糾合していったと述べている。そして、「黨員資格についての大まかなプログラムが起案され、ウラマーたちがイスラエルによる占領へ抵抗するための軍事訓練や行動に参加するようにメンバーに説くことで、効果的な動員がなされた」

が、その過程にはイラン革命政府の支援およびシリア政府の協力が不可欠であったことを認めている (Qāsim [2008: 26-27])。

イラン革命政府による「9名委員会」への積極的関与は、イラン側の資料でも確認できる。H・E・チェハビーは、1982年当時、イランの「イスラーム・シューラー会議 (Majles-e Shūrā-ye Eslāmī)」議長であったアリー・アクバル・ハーシェミー・ラフサンジャーニー (‘Alī Akbar Hāshemī Rafsanjānī, 後の第4代大統領)らの回顧録などにに基づき、イラン革命政府が「9名委員会」と関係を有していたことを明らかにしている。それらによれば、「9名委員会」は、1982年10月11日、アッバース・ムーサウィーを団長にテヘランへ使節団を派遣し、ホメイニーと面会、方針と組織の名称についての助言を仰いでいる。レバノン・シューラーの名称と設置については、その翌日のイラン国防最高評議会で決定されたものであり、隠密行動、集团的指導体制、段階的な組織形成を基本原則とした。ホメイニーは自らの代理人をレバノンに送り、レバノン・シューラーの設置と運営を指揮したとされるが (al-Husaynī [1986: 19], Chehabi [2006: 218]), このことが示す重要な点は、レバノン・シューラーがイランの国会にあたるイスラーム・シューラー会議のいわば地域支部として位置づけられていたことである。言い換えれば、「9名委員会」はイラン革命政府による「革命の輸出」戦略の一部に名実ともに組み込まれたのである。レバノン・シューラーは、1983年初頭、最初の会合を開いた (Faql Allāh [1994: 33])。

なお、このレバノン・シューラーには、7つの専門機関 (会議) が設けられ (文化、財務、政治、情報、軍事、社会、法) (al-Husaynī [1986: 19], Norton [1987: 102]), 最高意思決定機関の下に専門機関を有する後のヒズブッラーの組織構造の原型となったと考えられる²⁹⁾。こうして、イラン革命政府の主導によって、後のヒズブッラー指導部となる組織が組み上げられていったのである。

(2) 「殉教作戦」の開始

このような組織化と並行するかたちで、レバノンに駐留を続ける IDF と多国籍軍に対する軍事作戦がその規模を拡大させていった。作戦を担った軍事部門は、「イスラーム抵抗 (al-Muqāwama al-Islāmīya, Islamic Resistance)」と呼ばれる。軍事作戦の数は、IDF と SLA に対するものだけで1982年には40件だったのが、83年には296件、84年には812件にも及んだとする統計もある (al-Ilīyās ed. [2006a: vol. 2, 70])。

抵抗には砲撃、狙撃、待ち伏せ攻撃、爆破などあらゆる方法が用いられたが、この時期における最大の特徴は、爆薬を満載したトラックによる特攻攻撃、すなわち「殉教作戦 (al-‘amalīyāt al-istishhadiya)」であった。最初の殉教作戦は、1982年の11月11日、レバノン南部の都市スールの IDF 兵営に対して実行され、90名以上の死者を出した。続く第2の作戦は、翌年4月、IDF の車列に対して行われ、9名が死亡している (Smit [2000: 166-171])。

いずれの作戦についても、今日に至るまで、いかなる組織が実行したのか明らかにされていない。しかし、レバノン・シューラーが結成され、占領に対する抵抗の組織化が進んだ1982年の終わりを契機に、シーア派による政治的暴力の拡大が見られるようになった事実注目すべきである。この時期、IDFに対する抵抗だけではなく、レバノン国軍との軍事衝突も繰り返された。このことは、抵抗の対象をIDFとSLAだけではなく、レバノン国軍や欧米主導の多国籍軍にまで拡大させた、イスラーム革命の理念に基づく新しい抵抗のあり方が広がっていたことを示唆している。すなわち、彼らにとって、イスラエルとの停戦交渉を進め、欧米の力を借りることでキリスト教徒による国家建設を進めようとする当時のジュマイイル政権のレジティマシーは受け入れ難かった。これと並行するかたちで、イラン革命を範とするイスラーム国家の樹立を叫ぶ声が現れるようになった。フサイン・ムーサウィーは、「レバノン・イスラーム共和国」の建設を呼びかけ、トゥファイリーはベカーア高原地域に限定したミニ・ステイトとしての「レバノン・イスラーム共和国」の樹立を宣言している (Smit [2000: 171])。

したがって、抵抗の矛先が、IDFとレバノン政府だけではなく、その支援者である欧米諸国にも向けられるようになるのは時間の問題であった。1983年に入ると、4月13日にはベイルートの米国大使館、10月23日には多国籍軍として駐留していた米海兵隊と仏第1猟兵連隊がそれぞれ殉教作戦の標的となり、甚大な損害を被ることになった。この3つの作戦については、「イスラーム・ジハード (al-Jihād al-Islamī)」という名の組織が実行声明を発表したが、その実態はおろか実在すら疑問視された³⁰⁾。だが、攻撃の規模と殉教作戦という方法から、イラン革命政府とレバノンにおけるその支持者たち——言い換えれば、「9名委員会」ないしはレバノン・シューラー——によるものであったことはいわば公然の秘密となっている (Smit [2000: 172])。特に、その時点で米国の対中東政策とレバノンへの介入に対する厳しい批判を繰り返していたイスラーム・アマル運動が、真っ先に「犯行」を疑われることになった。同運動の指導者フサイン・ムーサウィーは、これを肯定も否定もしていない。

いずれにしても、一連の殉教作戦が、イスラームの名の下に実行されたこと、実行者がすべてシーア派であったこと、そして、IDFだけではなくレバノン政府や米国までがターゲットに含まれたことを考慮すれば、ホメイニーのイスラーム革命思想に忠誠を誓った者たちの行動であったと考えるのが自然であろう。その1つの証として、ヒズブッラーは、1982年に「最初の殉教者」となったアフマド・カシール (Aḥmad Qaṣīr) を英雄視し、作戦決行日である11月11日を「殉教の日」と定め、毎年祝賀を催すことでその「功績」を称えている (その意味では、殉教作戦は、自殺を禁じたイスラームにおける思想面でのイノベーションも看取できる——この点については、別稿で論じたい)。

軍事面において殉教作戦がもたらしたものは、何よりも多国籍軍とIDFのレバノンからの撤退であった。1984年2月の米海兵隊の撤収を皮切りに、3月末までに多国籍軍を構成した米

仏伊の兵力はレバノンからの段階的な退去を余儀なくされた。一方、IDFは、度重なる自爆攻撃への対応に追われることになる(図表3に示した以外にも、未遂や未然に阻止されたケースが複数あった)。N・A・ハムゼが指摘するように、殉教作戦は、「武力によるジハードの新たな方法の誕生を予兆させただけではない。むしろより重要なのは、イスラエル兵の心理を動揺させるように企図されていたことであろう」(Hamzeh [2004: 82])。自らの生命を賭した正体不明の見えない敵との戦いは、イスラエルにとっての「占領のコスト」を徐々に増幅させていった。1984年までに、IDFは3日に1名が死亡する事態に直面することになった(Norton [2007: 81])。こうしてイスラエルは、とうとう1985年にレバノン南部地域の「安全保障地帯」まで撤退を余儀なくされることになる。レバノン戦争を通してPLOを一掃するという当初の目的は達成したものの、それに代わるより強力な抵抗を生み出す皮肉な結果を招いたと言えよう。

図表3 殉教作戦(1982年11月～1984年9月)

日付	実行組織/実行者	場所	標的	被害	備考
1982年 11月11日	発表なし/アハマド・カスイール (Ahmad Qaṣīr)	スール	IDF兵営	死者90名以上	最初の殉教作戦。死者90名の内、IDF兵士は74名。カスイールは、ダイル・カーヌーン・ナハル出身。
1983年 4月13日	発表なし/アリー・サフィーン ッディーン(Ahī Safī al-Dīn)	スール郊外、ダイル・カーヌーン・ナハル	IDF車列	死者6名、負傷者4名以上	
1983年 4月18日	イスラーム・ジハード	ラーズ・ベイルート	米国大使館	死者63名(レバノン人職員32名、米国人17名、来館者14名)	米国人死者17名の内、8名がCIA職員
1983年 10月23日	イスラーム・ジハード/ジャファール・タイヤール (Ja'far al-Tayyār)	バイルート国際空港	米海兵隊兵営(多国籍軍)	死者241名、負傷者60名以上	死者241名の内、海兵隊員200名、海軍兵士18名、陸軍兵士3名
1983年 10月23日	イスラーム・ジハード	バイルート、ラムラ・バイダー地区	仏第1猟兵連隊兵営(多国籍軍)	死者58名、負傷者15名以上	
1983年 11月4日	イスラーム・ジハード	スール	IDF兵営(UNRWAビル)	死者60名以上、負傷者30名以上	死者60名の内、IDF兵士29名、レバノン人とパレスチナ人の捕虜30名以上
1984年 6月6日	発表なし/ビラル・ファハス (Bilal Faḥās) (単独行動?)	スール郊外、ザーフラーニー＝スール湾岸道路	IDF車列	負傷者9名	ビラル・ファハスは、アマル運動メンバーであり、ビッリー代表の元ボディーガード
1984年 9月20日	イスラーム・ジハード	東バイルート、キリスト教徒実効支配地区	米国大使館別館	死者14名	死者14名の内、米国人2名

(出所) Wright [1986: 69-110], Faḍl Allāh [1998], Smit [2000: 166-171], Mustafā [2003], Hamzeh [2004: 81-84], al-Iliyās ed. [2006a: vol. 2] などをもとに、筆者作成。

イスラエルとの心理戦争に効果を発揮した隠密行動は、前節で論じたように「9名文書」で確認された抵抗の基本原則であったが、同時に組織の生き残りの方法として念頭に置かれたものであったようである。この点について、現副書記長カーシムは、次のように述べている。「1985年〔の公開書簡の発表〕まで、ヒズブッラーは自立し自らを表現する単一の独立体ではなかった。我々は我々が誰なのか、我々が誰と関係を有しているのか知らぬままに活動していた。我々はまだ脆弱であり、ひとたび捕捉されたら打ち倒されていたことだろう」(Jaber [1997: 62])³¹⁾。そうだとすれば、ヒズブッラーがその存在を公に示した時点で、強力な組織が形成されていたことを意味する。

(3) ヒズブッラー指導部の出現

1984年6月18日、ヒズブッラーの機関誌『アル＝アフド (*al-'Ahd*)』(週刊)の準備号(特集「レバノンにおけるイスラーム革命の声」)が無料配布され、「レバノンにおけるイスラーム革命」と記されたヒズブッラーの党旗が登場した。そして、その図柄の脇には次のようなメッセージが記された。「イスラエルの存在を根絶するために結集することは、我々すべて1人1人の義務である」(Faḍl Allāh [1994: 35], Sankari [2005: 198], Alagha [2006: 325], 'Imād [2006: 160])。

ハサン・ファドルッラーは、次のように回想している。

イスラーム主義者たち (*al-Islāmīyūn*) は、〔レバノン・〕シュエラーに参加していったが、それは「すべてのムスリムにとっての権威として、それへの服従は義務であり、その決定は責務である」とする立場からであった。シュエラーの用法自体はイスラーム世界に浸透していたが、そのメンバーの名前は伏せられたままではあった。これと並行して、ヒズブッラー〔という組織〕の名称を生み出すスローガンが登場した。1984年5月、シュエラーは不変の名称の採用とすべての声明文に掲載される核となるスローガンを決定した。それこそが、「ヒズブッラー——レバノンにおけるイスラーム革命」であった。同じときに政治局 (*al-maktab al-siyāsī*) が設立され、週刊の機関誌『アル＝アフド』の発行が決定された (Faḍl Allāh [1994: 35])。

この頃——1984年半ば——までには、複数の組織が同時多発的にヒズブッラーの名称を用い始めていたようである。革命直後のイランでは、ホメイニーを熱烈に支持する若者たちによって同名の組織(ただし、ペルシア語読みではヘズボッラー)が結成されていた (*al-Huṣaynī* [1986: 16])。イラン革命の直後の段階で、バアルベックで教師をしていたアッバース・ムーサウィーが自身の学生らと共に「レバノンのヒズブッラー」という名のグループを結成していた

とされている (al-Madīnī [1999: 172])³²⁾。また、フサイン・ムーサウィーは、1983年10月27日に行われた英国人ジャーナリスト、R・フィスクによるインタビューにおいて、自らの組織にイスラーム・アマル運動とヒズブッラーの2つの名称を用いている (Fisk [2001: 521])³³⁾。確実なことは、組織としてのヒズブッラーへと糾合した者たちが、イランで成就したイスラーム革命への共鳴とホメイニーへの忠誠を共有していたことであろう。客観的な事実として、ヒズブッラーとイランの革命防衛隊のロゴマークが酷似していることを示しておきたい (図表4)³⁴⁾。



図表4 ヒズブッラー (左) とイラン革命防衛隊 (右) のロゴマーク

(出所) ヒズブッラーは筆者所蔵の党旗、イラン革命防衛隊は <http://www.ostan-ag.gov.ir>。

1985年2月16日、ヒズブッラーは公開書簡の発表を通して、世界に向けてその存在を示し、その世界観と思想を明らかにした。この日、同党は、レバノン南部地域で抵抗を指揮していたラーギブ・ハルブの殉教1周年を記念する集会をシヤーハ・フサイニーヤ (Ḥusaynīya al-Shiyāh, バイルト南部郊外) で開催し、公開書簡は、その際、「広報官」のアミン・サイイドによって発表された (*al-Safir*, February 17, 1985)。カースィムは、公開書簡の発表へ至る道のりを、次のように回想している。「2年半に渡ったヒズブッラーの結成期間 [1982年6月のレバノン戦争の開始から1985年2月の公開書簡の発表までの期間] は、イスラーム抵抗に代表される効果的なジハード作戦を完成させるのに十分なものであり、1985年にはイスラエルにレバノンからの部分的撤退を強いることになった。また、イスラームの信仰を解決とする見方と調和する政治的ビジョンを具体化するためにも十分な時間であった」 (Qāsim [2008:

145])。公開書簡の発表は、ヒズブッラーが1つの理念のもとに、名実ともに「アンブレラ組織」となったことを示すものであった。

ただし、指導体制が確立するには、それから1年強の時間を要したようである。1986年5月28日、最高意思決定機関としてのシューラー会議が参集され、そのメンバーは5名に固定された。同会議の下には7つの専門会議が置かれ(上述)、この5名とそれぞれの長7名の計12名が指導部を形成した(al-Husaynī [1986: 19], Ranstorp [1994: 307-308])³⁵⁾。このように指導体制は早くから明らかになっていたものの、各部門を担う具体的な名前が公表され始めるのは1989年になってからである。同年、ヒズブッラーの最高指導者の肩書きが書記長であることが正式に明らかにされ、トゥファイリーがその初代に選出された。

図表5は、ヒズブッラーの結成に中心的な役割を果たしたメンバーの一覧である。前節で触れたように、その多くがシーア派イスラーム学を修めるためにナジャフやコムへの留学経験を有している。その一方で、彼らはいわゆる伝統的なウラマーや名望家の家系の出身ではなく、むしろ経済的な理由により——不遇な宗派である「シーア派」として——レバノン国内で移住するような家庭の出身であった。また、ほとんどが1950年代とその前後の生まれであり、1980年代初頭の当時ヒズブッラーは30歳前後の若手のウラマーたちによって指導された事実が読み取れよう。

図表5 ヒズブッラーの主な結成メンバー

氏名	生年・出身地	経歴	ヒズブッラーでの役割	9名委員会(1)	レバノン・シューラー(2)	公開書簡(3)	備考
アッバース・ムーサウィー 'Abbās al-Mūsawī	1952年・ナビー・シート(ベカーア県バアルベック郡)	1969～70年イスラーム研究院(スール)、1970～78年ナジャフ留学、1979年レバノンに帰国、バアルベックにイマーム・マフディー・ムンタザル・ハウザを開設、レバノン・ムスリム・ウラマー連合に参加、ヒズブッラーの結成の会合に参加	1983～85年治安部門部長、1985年末～88年4月イスラーム抵抗司令官、1991年第2代書記長に選出(～1992年)、1992年ザーフラーニー郡にてイスラエルにより暗殺	○ (レバノン・ムスリム・ウラマー連合)		○	ナジャフではバーキル・サドルに師事
スブヒー・トゥファイリー Subhī al-Ṭufaylī	1948年・ブリーターール(ベカーア県バアルベック郡)	1965年ナジャフ留学、イスラーム・ダアワ党に参加、1974年レバノンに帰国、1976年コム留学、反王制革命運動に参加、1978年レバノンに帰国、イラン革命の支援活動を牽引、1982年イランとイラクのイスラーム・ダアワ党組織の会合、ヒズブッラー結成の会合に参加、バアルベックを中心にアッバース・ムーサウィーとともに対イスラエル抵抗を組織	1989年初代書記長に選出(～1991年)、1996年ヒズブッラーの政党化に反対し、ベカーア・ムスリム・ウラマー連合を結成、1998年ヒズブッラー指導部より離反、「飢えた者たちの運動」を結成、レバノンの治安部隊との戦闘ののち、鎮圧される	○ (レバノン・イスラーム・ダアワ党)	○	○	ナジャフではバーキル・サドルに師事、コムではカーズィム・ハーイリーに師事

抵抗と革命をむすぶもの (1) (未近)

ハサン・ナスルッラー Hasan Naṣr Allāh	1960年・バーズリーヤ(南部県スール郡)	父親は青果商。バイルートで初等・中等教育。1974年バーズリーヤに転居。スールで中等教育終了。1975年アマル運動に参加。バーズリーヤ支部幹部に就任。1976年ナジャフ留学。1978年レバノンに帰国。バアルベックのイマーム・マフディー・ムンタザル・ハウザに入学。1979年アマル運動の政治局員。バアルベック地区政務担当者に任命。1982年レバノン戦争にともないアマル運動を離脱。ヒズブッラーの結成に参加	1985年ヒズブッラーのバイルートおよび南部郊外地区担当。1986年コム留学。同年レバノンに帰国。1987年シューラー会議メンバーに選出。1992年第3代書記長に選出。現在再選5期目			○	スールではムハンマド・マンズール・ガラウイー(Muḥammad Mansūr al-Gharāwī)に師事。ナジャフではパーキル・サドルに師事。バアルベックではアッバース・ムーサウィーに師事
フサイン・ムーサーウィー Husayn al-Mūsawī	1943年・ナイルト(ベカーア県バアルベック郡)	バイルート・アラブ大学卒(アラビア語学)。アマル運動の結成に参加。初代副代表。執行部長。広報官に選出。1982年レバノン戦争にともないアマル運動を離脱。イスラーム・アマル運動を結成。ヒズブッラーの結成の会合に参加		○(イスラーム・アマル運動)	○		
イブラーヒーム・アミン・サイイド Ibrāhīm al-Amin al-Sayyid	1953年・ナビ・アイラー(ベカーア県ザフレ郡)	ナジャフ留学。コム留学。アマル運動のテヘラン代表。1983年ヒズブッラーに参加。1985年2月16日ヒズブッラーを代表して公開書簡を発表	初代「広報官」。1992年レバノン国民議会議員に選出(ベカーア県バアルベック=ヘルメル選挙区)。1996年再選。??年政治会議議長(～現在)		○	○	ナジャフではパーキル・サドルに師事
ナイーム・カースイム Na'im Qāsim	1953年・カフル・フィーラー(南部県ナバティーヤ郡)	父親はタクシー運転手。バイルートで初等・中等教育。「独学」でイスラームを学ぶ。1974年ムスリム学生のためのレバノン連合の活動に参加。1975年アマル運動結成に参加。文化部門の副担当。1977年レバノン大学教育学部フランス語学科卒。1978年アマル運動の中央委員会メンバーに選出。1982年以降ヒズブッラーの結成に参加するも、1989年まで指導部には入らず	1989年執行会議副議長。1991年副書記長(～現在)。パレスチナのインティファダへの支援のためのアラブ人員委員会メンバー			○	
ラーギブ・ハルブ Rāghib Harb	1952年・ジブシート(南部県ナバティーヤ郡)	ジブシートで初等教育。ナバティーヤで中等教育。1969年バイルートに転居。「イスラーム法学学院(al-Ma'had al-Sharā'i al-Islāmi)」入学。1970年ナジャフ留学2回。1974年レバノンに帰国。ジブシートのモスクのイマームに就任。1979年イラン革命の支援活動を開始。1983年イスラエルにより拘留・釈放。イラン・イスラーム共和国憲法の起草に参加	1983年よりジブシートを拠点にイスラーム抵抗を組織・指導。1984年2月16日自宅にてイスラエルにより暗殺(同じジブシート出身のアブドゥルカリーム・ウバイド('Abd al-Karīm 'Ubayd)が後継者に)。1985年2月16日の命日にヒズブッラーによって公開書簡が発表される			死亡	ナジャフではパーキル・サドルに師事。バイルートではフサイン・ファドルッラーに師事

図表6 ヒズブッラーの結成に関与したと見られる人物

氏名	生年・出身地	経歴	9名委員会 (1)	レバノン・シュエラー (2)	公開書簡 (3)	備考
ムハンマド・フサイン・ファドルッラー Muhammad Husayn Fadl Allah	1935年・ナジャフ (イラク)	父親はレバノンのアイナーター出身のナジャフへの留学生。1957年イスラーム・ダアワの結成に参加。「盟友」バーキル・サドルとともに文筆および政治活動。1965年イジュティハドの資格取得。1966年レバノンに「帰還」。イスラーム法学学院をはじめとする教育機関、および独自の福祉・医療活動を展開。1976年「イスラームと力の論理」を刊行。クルアーンに基づく「ヒズブッラー」という概念および用法を紹介。1985年ベイルート南部郊外で爆殺未遂		○		ヒズブッラーの「精神的指導者」と評されるが、指導部との直接的な関係は否定
ズハイル・カンジュ Zuhayr al-Kanj	19??年・???? (南部県ベカーア郡)	1982年、サイダー出身のマーヒル・ハンムード (Māhir Hammūd, スンナ派) とともにレバノン・ムスリム・ウラマー連合を結成			○	
サイード・シャバーン Sa'īd Shabān	1930年・パトルーン (北部県・パトルーン郡)	シーア派の家系に生まれるが、スンナ派に改宗。トリポリでイスラーム学を修める。1953～58年カイロ・アズハル大学留学。その後モロッコ、イラクに留学し、1964年レバノンに帰国。1950年「イスラーム集団 (al-Jamā'a al-Islāmiya)」(ムスリム同胞団のレバノン支部)の結成に参加。指導部メンバーに就任。1982年ホメイニーへの共鳴から新組織「イスラーム統一運動 (Haraka al-Ittiḥād al-Islāmī)」を創設・指導。1988年IDFに対する抵抗を組織。イスラーム抵抗に参加。1998年死去		○		ムスリム同胞団の急進派から思想的影響を受ける

- (注) (1) ○は「9名委員会」のメンバーであったことを示す。残りの6名については不明。NBN [2003], Shapira [1988: 124] による。
 (2) ○はレバノン・シュエラーのメンバーであったことを示す。al-Waṭan al-'Arabī, December 11, 1987の調査報道による。
 (3) ○は1985年2月16日のラーギブ・ハルブ殉教1周年記念集会および公開書簡の発表に立ち会ったことを示す。al-Safir, February 17, 1985による。その他の参加者 (全員シャイフの敬称が付く) は次の通り。サラーフッディーン・アルカダーン (Ṣalāh al-Dīn Arqadān, ウラマー, イスラーム集団), アリー・カリーム (Alī Karīm, ウラマー, ヒズブッラーのレバノン南部地域司令部部長), アリー・サナーン (Alī Sanān), ムハンマド・ミクダード (Muhammad al-Miqdād), ユースフ・スバイティー (Yūsuf Subaytī, ウラマー), リダー・マフディー (Ridā Mahdī), ハサーン・アブドゥッラー (Hasān 'Abd Allāh), ガーズィー・フナイナ (Gāzī Hunayna), フサイン・ダルウィーシュ (Husayn Darwīsh), フサイン・ガブリース (Husayn Ghabrīs), ハダル・マージド (Khaḍar Mājīd), アイマン・ハムダル (Ayman Hamdar), アリー・ハージム (Alī Khājim, ウラマー, レバノン・ムスリム・ウラマー連盟)。
 (出所) al-Nahār, al-Safir, al-Sharq al-Awsat, al-Waṭan al-'Arabī, al-'Ahd, al-Intiqād などの報道資料, al-Husaynī [1986], Mallat [1988], Shapira [1988], Sharārā [2006], 'Imād [2006], Markaz al-'Arabī li-l-Ma'lūmāt - al-Safir [2006b: vol. 3], <http://www.altawhid.org>, <http://www.naimkassem.org>, および筆者によるヒズブッラー広報局での聞き取り調査に基づき、筆者作成。

(4) シリアの介入——レバノン実効支配のプロトタイプ？

ところで、イラン革命政府による革命防衛隊のレバノンへの派遣が、シリアのハーフィズ・アサド (Hāfiz al-Asad) 政権の協力のもとで行われたことはよく知られている。シリアは、地政学的にはレバノンとイランの中間に位置し、両国間の物理的移動にとって重要な国家である。また、1976年から「平和維持」を名目にレバノン内戦に軍事介入しており、同国内で割拠する政治勢力のパワーバランスを左右する存在となっていた。

シリアによるレバノン内戦へ介入の「真意」は、イスラエルとの軍事的対峙の文脈で理解すべきであろう。シリア軍の大規模展開は、内戦によって生じたレバノンの政治的真空をイスラ

エルに先んずるかたちで埋めるものであり、その上で自国の安全保障にとって有利となる政治状況の創出が期待された。だが、そこには次のようなジレンマがあった。——レバノンにおける親イスラエル政権の誕生は何としても阻止せねばならない。しかし、反イスラエルを掲げる急進的な政権は、レバノンだけではなくシリアを巻き込む軍事侵攻を招く危険性を生む。

シリアとヒズブッラーの関係においても、このジレンマを反映したものであった。レバノン戦争が始まってから最初の数週間で、レバノン駐留シリア軍は IDF との激しい戦闘において苦戦を強いられ、結果的に壊滅的な打撃を被ることになった。こうしたなか、シリアはイラン革命政府による革命防衛隊のレバノン派遣に合意し、開戦からわずか5日後の6月11日にはイランの第27旅団先遣隊と国軍第58レンジャー部隊が空路ダマスカスへと到着した。ところが、シリアは、革命防衛隊の「文化部門」1500人——おそらく解放運動局——意外にはレバノン入国を許さず、その結果、7月10日に同旅団・部隊はイランへ帰国した (Chehabi [2006: 216])。このようなシリアの判断の背後には、レバノンにおけるイランの軍事的あるいは政治的ヘゲモニーの形成に対する懸念があった指摘されている (Hinnebusch and Ehteshami [1997: 122-125], Goodarzi [2009: 75-77])。いずれにせよ、結果的にイラン革命政府によるレバノンの抵抗への支援は限定的なものとなった。

このような当時のシリアとヒズブッラーとの微妙な関係については、現副書記長カースイムの回想からも伺える。

アサド大統領は〔革命防衛隊のレバノン派遣に〕同意し、その後ヒズブッラーを結成する若者たちの訓練のために革命防衛隊がシリアを経由してレバノンへと送られた。それは何よりも、イスラエルの占領に対する勇敢な抵抗としてであった。／ヒズブッラーとシリアとの関係は、当初は安全保障における協調にとどまるものであり、戦闘員の兵站を支援し、立ち現れる様々な諸問題に対応するものであった。そのため、政治的な関係へと発展することはなかった。ヒズブッラーは、抵抗の実践と支援に取り組んでいたため、政治的関係の構築を重視していなかった。他方、シリアも、ヒズブッラーを政治的に何かを代表するものとしてではなく、あくまでも抵抗として扱ったのである (Qāsim [2008: 356-357])。

したがって、この時期のイラン、シリア、ヒズブッラーの三者関係は、安全保障という特定の領域に限定された条件付きの同盟に基づくものであった。しかし、このヒズブッラーを軸とするイランとシリアとの関係の緊密化が、当時において新しい現象であったことは強調しておく必要があるだろう。シリアのバアス党政権は、1970年代末からシリア・ムスリム同胞団 (al-Ikhwān al-Muslimīn fī Sūriya) を中心とするイスラーム主義勢力に対する激しい弾圧を続けており、その頂点が1981年2月の「ハマー虐殺」であった (末近 [2005: ch 16])。シリアは、

なぜ、イデオロギー的には相容れないはずのイラン革命政府やヒズブッラーとの関係を構築していったのであろうか。この問いに答えるには、三者の関係緊密化が、1980年代初頭の中東政治の変化を写し取ったものであったことに注目しなくてはならない。

多くの識者が指摘するように、シリアとイランが急速に接近したのは、1979年から82年にかけてであったが (Agha and Khalidi [1995], Hinnebusch and Ehteshami [1997], Goodarzi [2009]), その要因として、1979年のイラン革命を発端とする、次の2つの政治的変化が挙げられよう。

第1に、1979年の革命成功の結果、イランが親イスラエルから反イスラエル路線へと政策転換したことである。さらに、同年に起きたもう1つの「事件」、すなわちキャンプ・デーヴィッド合意 (エジプトとイスラエルの単独和平) によってエジプトが「アラブの戦線」から離脱するなかで、イランはシリアにとっての潜在的な共闘者となった。第2に、イランと革命の飛び火を恐れる周辺国、特にイラクとのあいだで、政治的緊張が高まったことである。その緊張は1980年のイラン・イラク戦争の勃発により現実の衝突へと転じることとなった。シリアは、それまでもイラクとの政治的な摩擦——バアス党の正統性争い、対イスラエル戦線における足並みの乱れ、シリアのレバノン内戦介入をめぐる見解の相違、ユーフラテス川の水資源をめぐる権利争いなど——を抱えていたことから、イランを支持する姿勢を明確に示し、1982年春にはイラクに対する側面攻撃を開始している (Hinnebusch and Ehteshami [1997: 91-97], Goodarzi [2009: 54-57])。つまり、この時期のイランとシリアは、イスラエルとイラクの両国を共通の敵とする戦線を形成していったのだと言えよう。この戦線は、1982年3月の通商協定および翌月の軍事協定の締結を通して公式なものとなった。

したがって、1982年6月に勃発したレバノン戦争において、シリアとイランが共闘するのは自然な流れであった。しかし、シリアは上述のイスラエルとの対峙におけるジレンマを抱えていたため、ヒズブッラーや革命防衛隊を通じたイランの影響力の拡大には慎重な姿勢を崩すことはなかった。その姿勢は、革命防衛隊のレバノン展開に対する限定的な承認だけでなく、ヒズブッラーのいわばライバルであったアマル運動への支援によって保たれた³⁶⁾。1982年から84年にかけて、アマル運動は、シリアの経済的・軍事的支援を受けながら勢力を維持し続け、イスラエルを刺激しかねないイランとヒズブッラーだけではなく、PLOを中心とするパレスチナ人武装勢力の活動を牽制ないしは抑制する役割を果たした。その象徴が、1984年2月の西ベイルト掌握であり、1985年から翌年にかけてのパレスチナ難民キャンプに対する包囲・攻撃、いわゆる「キャンプ戦争」であった (Deeb [1988: 697-698], Hinnebusch and Ehteshami [1997: 129-135])³⁷⁾。シリアにとって、ヒズブッラーとアマル運動は対レバノン政策のジレンマにおけるそれぞれの側面、すなわちイスラエルとの対峙とイスラエルの懐柔のそれぞれを制御する存在となっていたのである。

シリアから見た場合のこのようなヒズブッラーとアマル運動の「役割分担」は、内戦期の1980年代を通して確立され³⁸⁾、少なくとも2000年の「南部解放」まで繰り返し見られることになる。両組織は、時期により濃淡はあるものの、シリアにとってのレバノンにおける同盟者として、レバノン情勢をシリアの許容範囲内に収めるいわば安全弁としての役割を果たした。1980年初頭のヒズブッラーの誕生と勢力拡大は、今日に至るシリアとレバノンの関係の形成と同期しており、その意味において、後の両国の政治——両国を1つとする「政治構造」(青山・末近 [2009]) ——の土台を築いた重要な要素であったと言えよう。

以上見てきたように、「9名委員会」からヒズブッラー指導部への組織的変容については、次の3つの特徴を指摘できる。第1に、ホメイニーへの忠誠を共通項としていわば自発的に結成された「9名委員会」は、まもなくイラン革命政府による「革命の輸出」の「受け皿」として、物理的支援を含む実質的な関係を築いていった。そのことは、イランのイスラーム・シューラー会議の地域支部としてのレバノン・シューラーの名称に象徴された。第2に、レバノン・シューラーは、イラン革命政府の支援を受けることでIDFおよび多国籍軍に対する抵抗を拡大していったが、この期間にはシューラー会議を頂点とする「アンブレラ組織」を同時並行的に形成していった。そして、この抵抗の活動を媒介とした組織化の1つの到達点が、1985年2月発表の公開書簡であった。第3に、このようなイラン革命政府によるヒズブッラー誕生への関与を側面支援したのが、シリアであったが、この時期の両国の急速接近を促したのは1979年以降の中東政治の変動であった。

むすびにかえて——抵抗と革命をむすんだもの

本稿では、研究上の空白となっていた組織としてのヒズブッラーの誕生過程について、近年徐々に入手できるようになってきた彼ら自身の「語り」を参照しながら、今一度の検討を試みるものであった。

まず、ヒズブッラーの抵抗の原点となった「9名委員会」の結成過程については、次の2つの特徴を指摘することができよう。第1に、同委員会は第一義的にレバノンにおける抵抗組織であったが、同時にトランスナショナルなシーア派のネットワークを背景に結成されたものであった。メンバーを輩出した3つのグループに関して、イスラーム・アマル運動がレバノン、イスラーム・ダアワ党がイラク、レバノン・ムスリム・ウラマー連合がイランというそれぞれ異なるバックグラウンドを有して誕生・発展したものであった。第2に、これらを結集させたのは、シーア派のネットワークを通じたイランの革命思想への共鳴だけではなく、1970年代末から80年代初頭にかけての中東政治の変動がもたらしたこれらの組織の性格および相互の関係の変化があった。とりわけ、当時進行していた3つの戦争——レバノン内戦、レバノン戦

争, イラン・イラク戦争——が, アマル運動の結成, 同運動とイラン革命政府との決裂および内部分裂, イラクで活動していたレバノン人のイスラーム・ダアワ党員の帰国を導き, 「9名委員会」の結成を準備することとなった。

イラン革命政府が「9名委員会」に対する直接関与を開始したのは, 1982年の秋以降のことであった。そこで初めて「革命の輸出」の「受け皿」としてのレバノン・シューラーが組織され, また, 革命防衛隊の派遣を通じた物理的な支援が本格的に進められた。だが, ここでもイランとシリアの同盟関係という, 中東政治の新たな局面が重要な意味を持った。両国の直接的・間接的支援により, 彼らは殉教作戦に象徴されるイスラエルおよび欧米勢力に対する抵抗を強化していった。そして, この抵抗の強化こそがヒズブッラーの組織化の進展そのものであり, 1985年の公開書簡の発表をもってその最初の段階を終えたのである。

冒頭の問いに戻ろう——なぜ, いかにして, ヒズブッラーは誕生したのか。抵抗と革命をむすんだものがホメイニーの革命思想が発する強力な磁力であったことは, 改めて言うまでもない。また, ヒズブッラーの組織化においてイラン革命政府からの支援があったことは疑いない。しかし, このことから, ヒズブッラーをイランの創造物とするのは予定調和のそしりを免れないだろう。なぜならば, 現実に組織レベルにおいて抵抗と革命をむすびつけ, その誕生を準備したのは1980年代初頭の中東政治の変動であったからである。本稿は, 「アンブレラ組織」に糾合していった諸組織および諸団体の動静に注目することで, その点を改めて浮き彫りにする試みであった。

この点を敢えて強調するならば, こういう言い方も許されるかもしれない——ヒズブッラーは単なるレバノンの抵抗でもなく, また, イランによる創造物でもない, トランスナショナルな中東政治の産物である, と。そうだとすれば, 今日において彼らが中東政治の結節点——レバノン, パレスチナ/イスラエル, シリア, イラン, 米国などの政治的思惑の交差する点(末近 [2006a] [2006b])——となっていることは偶然ではなく, こうした「前史」の把握がヒズブッラーと中東政治の現在と今後を考えていく上でも1つの手がかりとなるだろう。

注

- 1) ヒズブッラーの9.11事件に対する認識と対米関係については, 末近 [2003] を参照。
- 2) これにともない, ヒズブッラー指導部は1990年代半ばに党旗のカラーパターンも変更した。それまでの白地に赤, あるいは黒地に白といったものから, 現在の黄色地に緑のパターンに統一された。またこの頃, ヒズブッラーは党旗とレバノン国旗を同時に掲げることが多くなった。これは現行のレバノン国家の存在を容認し, 革命による体制転換を一時凍結したことを示唆する。筆者によるヒズブッラー広報事務所 (Maktab Hizb Allāh li-l-I'lāmīya, ベイルート南部地域) における聞き取り調査による。(1999年8月13日)。
- 3) ナスルッラーの経歴と人物像については, 末近 [2007] を参照。

- 4) レバノンでは、ハウザ (hawza) はイランやイラクにあるような宗教教育機関の複合体ではなく、単体の宗教学校を意味する (Abisaab [2006: 231])。
- 5) A・ムーサウィーによれば、この3つのグループ以外に、PLO とレバノン国内の共産主義諸勢力のメンバーも参加したとされる (al-Mūsawī [2000: 25-26])。
- 6) レバノン国民抵抗戦線は、レバノン内戦初期に結成された左派勢力を中心とした改革派による軍事同盟、「レバノン国民運動 (al-Ḥaraka al-Waṭaniya al-Lubnāniya, Lebanese National Movement)」を母体とし、PLO と共闘関係にあった。これに参加した組織は次の通り。シリア民族社会主義党 (al-Ḥizb al-Sūrī al-Ijtimāī), レバノン共産党 (al-Ḥizb al-Shuyūī al-Lubnānī), レバノン共産主義行動組織、イスラーム集団 (al-Jamā'a al-Islāmiya), アラブ社会主義バース党 (Ḥizb al-Ba'th al-'Arabī al-Ishtirākī), 人民委員会・同盟連合 (Tajammu' al-Lijān wa al-Rawābiṭ al-Sha'bīya), アラブ社会主義連合 (al-Ittiḥād al-Ishtirākī al-'Arabī), アマル運動。
- 7) 同書の初版については、英訳が刊行されている (Qassem [2005])。本稿では、2008年発行の第4版を用いる。
- 8) 宗派主義体制の仕組みについては、青山・末近 [2009: 14-18] を参照。
- 9) アマル運動はレバノン社会および政治の改革を目指していたが、その名が示すようにイスラエルの占領に対する抵抗が最大の課題であったことにも留意すべきである (al-Iliyās ed. [2006b: vol. 2, 93-95])。
- 10) 山尾によれば、イスラーム・ダアワ党の結成年については1957, 58, 59年のそれぞれ3つの説がある。その上で、同党がシーア派宗教界との積極的な連携を目指すものとして結成されたことから、当時のシーア派ウラマーの最高権威であるムフシン・ハキーム (Muḥsin al-Ḥakīm) の主導によって開かれた1957年10月のナジャフでの一連の会合を「実際に党の出発点としての意味をもった」ものとする見解を示している (山尾 [2006: 3-5])。
- 11) レバノンからの留学生のなかには、ヒズブラーの結成に思想的な貢献をし、しばしば「精神的指導者」と評されてきたムハンマド・フサイン・ファドルラー (Muḥammad Husayn Faḍl Allāh) がいた。ファドルラーは、イスラーム・ダアワ党の創設者の一人であり最大の思想家であったバーキル・サドル (Bāqir al-Ṣadr) と共に、ナジャフでウラマー協会の機関誌『アル=アドワー (al-Adwā, 光焰)』の編集にたずさわり、イスラームへの覚醒の呼びかけを行った (Mallat [1993: 16-17], Sankari [2005: 73-122])。
- 12) アマル運動の当時の代表フサイン・フサイニー (Ḥusayn al-Ḥusaynī) は、1980年1月14日付の機関誌『アマル (Amal)』において、イランでの革命の成功について次のように述べている。「我々はイラン革命を2つの観点から見ている。第1の観点は、我々の共通の宗教的アイデンティティであり、我々が同様にシーア派であるという事実である。…我々がイラン革命を評価する上での第2の観点は、我々アラブ人がよく知っていること、すなわちイスラエルが意図的にアラブに敵対し、その政策がエルサレムとアラブの土地の占領を招いているという事実である。反イスラエルを掲げるイラン革命の成功は、我々が南部レバノンの土地を解放することに寄与するだろう。以上の2つの観点から、イラン革命は我々にとっての不利益などではなくむしろ利益であり、また、我々の国益と合致する事件である」 (Shaery-Eisenlohr [2008: 105])。
- 13) イラン自由運動の結成メンバーの1人で、後に革命政府において国防相をつとめたモスタファー・チャムラーン (Mostafā Chamrān) は、レバノン南部地域の都市スールを拠点に、アマル運動やレバノン・イスラーム・ダアワ党のメンバーらに軍事訓練を施した (Sharārā [2007: 100, 109, 269])。
- 14) イランの革命暫定政府 (1979年2月4日～11月6日) および重要ポストにおけるアマル運動関係者

- には、メフディー・バーザルカーン (Mehdī Bāzarqān, 首相, イラン自由運動出身), エブラーヒーム・ヤズディー (Ebrāhīm Yazdī, 副首相兼外相, 自由運動出身, 1979年4月任命), サードク・タバータバーイー (Šādeq Tabātabā'ī, 広報官, ムーサー・サドルの甥), サードク・グトブザーデ (Šādeq Qoṭbzāde, イラン国营放送会長, 後に外相, 自由運動出身), チャムラーン (国防相, 革命防衛隊司令官, 自由運動出身, 1980年4月アマル執行部に選出) などがいた。
- 15) ナスルラーは、当時アマル運動のベカーア高原地区の政務担当官であった (Shidyāq [2006: 7-16])。
- 16) テヘランにおいて解放運動局主導で「被抑圧者のための世界会議」が開催され (Sankari [2005: 193], Faql Allāh [1994: 12-13]), レバノンからの使節団としてフサイン・ファドルラー, トウファイリー, ムハンマド・ヤズバク (Muḥammad Yazbak), アフィーフ・ナーブルスィー ('Afīf al-Nāblusī), フサイン・クーラーニー (Ḥusayn al-Kūrānī, レバノン・イスラーム・ダアワ党代表), アミーン・サイイドら, 後にヒズブラーの幹部となった者たちが参加したとされる (Hamzeh [2004: 24])。同使節団には、「レバノン・シーア派イスラーム最高評議会 (al-Majlis al-Islāmī al-Shi'ī al-Ā'lā)」の副議長マフディー・シャムスディーン (Mahdī Shams al-Dīn) と後に対イスラエル武装抵抗組織の司令官となるラーギブ・ハルブラも名を連ねていた (Jaber [1997: 47])。
- 17) レバノン・ムスリム・ウラマー連合は、「9名委員会」のメンバーを選出したものの、今日までヒズブラーとは独立して運営されている。最初の指導部は20名の比較的若い中堅のウラマーから構成された (Khājim [n.d.], Sankari [2005: 294-296])。1984年初頭には機関誌「イスラーム統一 (al-Waḥda al-Islāmīya)」(月刊)の発行を開始した。1990年には、独自の出版社「イスラーム統一書店 (Dār al-Waḥda al-Islāmīya)」をベイルート南部郊外の本部の側に開設し、政治誌『アル=ビラード (al-Bilād)』(週刊)を発行している (Rosiny [1999: 111])。レバノン・ムスリム・ウラマー連合の理念や組織構造については、公式ウェブサイト (<http://www.tajamo.org/>) を参照。
- 18) ハサン・ファドルラーは、第3のグループを無所属の個別のウラマーたちとしているが、それはこのムスリム・ウラマー連合の組織的な緩やかさによるものである (Faql Allāh [1994: 33])。
- 19) 救国委員会に参加した政治勢力は次の通り。サルキース大統領 (マロン派), シャフイーク・ワッザーン (Shafīq al-Wazzān) 首相 (スンナ派), 進歩社会主義党首ワリード・ジュンブラート (ドルーズ派), レバノン軍団 (al-Quwāt al-Lubnānīya) 代表バシール・ジュマイイル (Bashīr al-Jumayyil, マロン派), アマル運動代表ビッリー (シーア派)。
- 20) フサイン・ムーサウィーはアリー・シャリーアティー ('Alī Sharī'atī) のイスラーム革命思想に影響を受け、レバノンにイスラーム国家を樹立することを目指していたと言われている (al-Safīr, June 10, 1982)。
- 21) アマル運動を世俗主義的とする評価は研究者のあいだに広く浸透しているが、イスラーム・アマル運動や後に結成されたヒズブラーといったイラン型のイスラーム革命に共鳴したイスラーム主義者たちによる見方が影響している可能性もある。この問題は、アマル運動の本体と分派との相関関係のなかで慎重に論じる必要があるだろう。それは、イスラーム主義とは何かという問い、そしてその多様性を精査する作業でもある。
- 22) R・シャイリー=アイゼンロアは、同運動のこのようなナショナリズムを想起させる言動に着目し、レバノンではそれが世俗主義といわば同義とされてきたことを指摘する。そして、その原因として、第1に、レバノンのナショナリズムがキリスト教マロン派の世俗主義的ナショナリズムに同一視されてきたこと、第2に、ナショナリズムはそもそも世俗主義に立脚するという西洋的近代化に立脚した暗黙の前提が存在してきたことを挙げている (Shaery-Eisenlohr [2008: 107])。この点については、

- 今後さらなる研究が必要であろう。
- 23) ムフタシャミーは、アマル運動の指導部に対して「救国委員会」からの撤退を要求していた。また、アマル運動の「救国委員会」への参加に対するアミンによる批判は、在レバノン・イラン大使モースー・ファフル・ロウハーニー (Mūsā Fakhr Rowhānī) によって支持されていた (Hitti [1993: 183])。
- 24) 『アル=ワタン・アル=アラビー (*al-Waṭan al-'Arabī*)』は、レバノン・シュラーの5名のメンバーとは、イブラーヒーム・アミン、フサイン・ファドルッラー、トゥファイリー、フサイン・ムーサウィー、サイード・シャアバーン (Sa'īd Sha'bān) であったとされる (*al-Waṭan al-'Arabī*, December 11, 1987)。
- 25) 革命防衛隊のレバノンへの派遣については、1980年初頭までにベイルートに滞在していたイラン・イスラーム革命の指導者の1人、ホセイン・アリー・モンタゼリー (Hossein 'Alī Montazerī) の息子が公言しており、1981年6月にイラン国会で採択されていた (Ranstorp [1997: 33])。
- 26) アッパース・ムーサウィーは、ナジャフ留学を終えてレバノンに帰国した後、バアルベックにこのハウザを設立した。同ハウザでは、後のヒズブッラー書記長ナスルッラーが学んだ (Shidyāq [2006: 7-16])。
- 27) 当時の局長は、メフディー・ハーシェミー (Mehdī Hāshemī)。
- 28) イスラーム・アマル運動は、結成前後からイラン革命政府との緊密な関係を築いていた。フサイン・ムーサウィーの右腕と言われたアブー・ヒシャーム (Abū Hishām) が、6月10日の段階でシリアにてイラン革命政府の高官たちと面会している。また、イラン国营放送 (IRNA) は、7月22日に初めてイスラーム・アマル運動の名を用いた (Smit [2000: 169, 193])。
- 29) 今日のヒズブッラーの組織構造については、青山・末近 [2009: 171] を参照。
- 30) 米国大使館爆破の実行声明において、イスラーム・ジハードは次のように述べ、米国のレバノンからの撤退を要求した。「我々は神の兵士である…我々はイラン人でもシリア人でもパレスチナ人でもない。クルアーンの教えに従うムスリムである。…我々はその〔米国大使館爆破〕の後に、より激しい攻撃を続けていくと言った。そして、今彼らは何を相手にしているか理解している。暴力は我々の唯一の道である」 (Wright [1986: 73])。
- 31) ヒズブッラーが1985年2月まで隠密行動を継続した理由、言い換えれば、その時点で存在を公表した理由として、レバノン南部地域で抵抗を組織し、殉教作戦の指揮を執っていたラーギブ・ハルブとムハンマド・サアド (Muḥammad Sa'ad) の安全を保障するためであったとの見方もある。ハルブとサアドがそれぞれ1984年と85年に暗殺されたことから、その必要がなくなり、ヒズブッラーは公開書簡を作成・発表したとされる。公開書簡は、ハルブの一周忌のタイミングで発表された (Hamzeh [2004: 82])。
- 32) アッパース・ムーサウィーによる「レバノンのヒズブッラー」という表現は、レバノン以外にもヒズブッラーが存在することを前提にしていたとも言える。
- 33) ヒズブッラーの名称については、フサイン・ファドルッラーの思想に基づくものであったとの見方もある。J・サンカーリーは、その根拠として、フサイン・ファドルッラーの1976年の著書『イスラームと力の論理 (*Islām wa Manṭiq al-Quwwa*)』において、クルアーンに記されているヒズブッラー (神の党) とヒズブッシャイターン (*ḥizb al-shayṭān*, 悪魔の党) の対比を用いて、イスラームの防衛のための組織を結成することを奨励していることを挙げている (Sankari [2005: 198])。
- 34) Z・マアスリーによるレバノン内戦期の政治ポスターに関する研究においても、1984年の5月には現

在のヒズブッラーのロゴマークが流通していたことが確認できる。そのロゴマークは、同月末の「世界エルサレムの日」を告知するポスターに用いられている (Maasri [2009: 83-84])。

- 35) S・フサイニーによれば、ヒズブッラーはレバノンを3つの地区 (バイルートおよび南部郊外地区、ベカーア地区、南部地区) に分け、それぞれにシューラー会議を設置していた。それらを統括する最高意思決定機関は、「最高シューラー会議」と呼ばれた (al-Husaynī [1986: 19])。
- 36) シリアとアマル運動およびその前身である奪われた者たちの運動との関係は、1970年代初頭まで遡る。大統領の宗教をイスラームとする条項を盛り込んだ1973年のシリアの憲法改正に際して、ハーフィズ・アサド大統領は、同派がシア派十二イマーム派と同様に、正統なムスリムでありシア派であるとの内容の公式発表を行った。この見解は、レバノンのジャーファリー派のムフティであるアブドゥルアミール・カバラーン ('Abd al-Amīr Qabalān) に認められた。加えて、ムーサー・サドルからも、アラウィー派が正統なイスラーム教徒との内容のファトワー (fatwā, 法学裁定) を得た (シール [1993: 162-163], Seale [1989: 172-173])。
- 37) レバノン国民主義を掲げるアマル運動にとって、シリアとのつながりはイデオロギー的な問題を孕むものであった。これに関して、ピッリー代表は、次のような立場を表明していた。「シリアとの統合は不可欠であり、それは、経済、安全保障、政治、情報、教育分野における実効性をともなった合意によってなされるべきである。それらはレバノンの主権を脅かさないものすべきである。」 (Norton [1987: 76])。
- 38) 1980年代のシリアとヒズブッラーおよびアマル運動との関係については、AbuKhalil [1990] を参照。

[付記] 本稿は、NIHU プログラム「イスラーム地域研究」京都大学拠点・ユニット1「国際関係のなかの国際組織」主催のワークショップ「イラン・イスラーム革命30周年：中東諸国への政治・経済的インパクト」(2009年2月28日、於京都大学)にて行った研究報告「イラン・イスラーム革命とレバノンのシア派：アマルからヒズブッラーへ (1978～1982年)」に基づくものである。数多くの貴重なコメントを下された出席者の方々に記して深く感謝申し上げたい。なお、本稿は、2007～08年度科学研究費補助金・若手研究B「レバノン・ヒズブッラーの思想と活動に関する実証研究」(研究課題番号：19710213) および2009～11年度科学研究費補助金・基盤研究B「現代東アラブ地域の政治主体に関する包括的研究：非公的政治空間における営為を中心に」(研究課題番号：21310157)の成果の一部である。

引用文献

- 青山弘之・末近浩太 [2009] 『現代シリア・レバノンの政治構造 (アジア経済研究所叢書5)』岩波書店。
- シール, パトリック [1993] 『アサド——中東の謀略戦——』(佐藤紀久夫訳) 時事通信社。
- 末近浩太 [2002] 「現代レバノンの宗派制度体制とイスラーム政党——ヒズブッラーの闘争と国会選挙——」日本比較政治学会編『現代の政治と政党——比較のなかのイスラーム——』早稲田大学出版部, 181～212ページ。
- [2003] 「レバノン, ヒズブッラーのジレンマ——対米・イスラエル強硬路線とイスラーム的言動—— (特集 イラク戦争とイスラーム)」『季刊アラブ』第105号 (夏), 10～13ページ。
- [2005a] 「レバノン・ヒズブッラー——「南部解放」以降の新戦略——」『現代の中東』第38号 (1月), 19～38ページ。
- [2005b] 『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版。
- [2006a] 「中東政治を左右する存在——「ヒズボッラー」とは何か——」『外交フォーラム』第132 (326)

- 219号 (10月), 14～16ページ。
- [2006b] 「レバノン包囲とヒズブッラー (連載講座 中東の政治変動を読む6)」『国際問題』第555号 (10月), 50～58ページ。
- [2007] 「ヒズブッラーのレジスタンス思想——ハサン・ナスルッラー『勝利演説』——」『イスラーム世界研究』第1巻, 第1号 150～171ページ。
- ホメイニー, R. H. [2003] 『イスラーム統治論・大ジハード論』(富田健次編訳) 平凡社。
- 山尾大 [2006] 「ダアワ党とシーア派宗教界の連携——現代イラクにおけるイスラーム革命運動の源流——」『現代の中東』第41号 (7月), 2～20ページ。
- Abisaab, Rula Jurdi [2006] “The Cleric as Organic Intellectual: Revolutionary Shi’ism in the Lebanese *Hawzas*,” H.E. Chehabi ed., *Distant Relations: Iran and Lebanon in the Last 500 Years*. London: Centre for Lebanese Studies and I. B. Tauris, pp. 231-258.
- Abukhalil, Asad [1990] “Syria and the Shiites: al-Asad’s Policy in Lebanon,” *Third World Quarterly*, Vol. 12, No. 2, pp. 1-20.
- Agha, H. and A. S. Khalidi [1995] *Syria and Iran: Rivalry and Cooperation*. London: Pinter Publishers for the Royal Institute of International Affairs.
- Ajami, Fouad [1986] *The Vanished Imam: Musa al-Sadr and the Shia of Lebanon*. London and New York: I. B. Tauris.
- Alagha, Joseph [2006] *The Shifts in Hizbullah’s Ideology: Religious Ideology, Political Ideology, and Political Program*. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Chalabi, Tamara [2006] *The Shi’is of Jabal ‘Amil and the New Lebanon: Community and Nation State, 1918-1943*. New York: Palgrave Macmillan.
- Chehabi, H.E. [2006a] “Iran and Lebanon in the Revolutionary Decade,” H.E. Chehabi ed., *Distant Relations: Iran and Lebanon in the Last 500 Years*. London: Centre for Lebanese Studies and I. B. Tauris, pp. 201-230.
- Deeb, Marius [1986] *Militant Islamic Movements in Lebanon: Origins, Social Basis, and Ideology*. Washington D.C.: Center for Contemporary Arab Studies, Georgetown University.
- [1988] “Shia Movements in Lebanon: Their Formation, Ideology, Social Basis, and Links with Iran and Syria,” *Third World Quarterly*, Vol. 10, No. 2 (April), pp. 683-698.
- Ehteshami, Anoushiravan and Raymond A. Hinnebusch [1997] *Syria and Iran: Middle East Powers in a Penetrated Regional System*. London and New York: Routledge.
- Faḍl Allāh, Ḥasan [1994] *al-Khiyār al-Ākhir: Hizb Allāh al-Sīra al-Dhātīya wa al-Mawqif*. Beirut: Dār al-Hādī.
- [1998] *Ḥarb al-Īrādāt: al-Šīrā al-Muqāwama wa al-Iḥtilāl al-Isrāīlī fī Lubnān*. Beirut: Dār al-Hādī.
- Fisk, Robert [2001] *Pity the Nation: Lebanon at War*. 3rd edition. Oxford and London: Oxford University Press.
- Goodarzi, Jubin M. [2009] *Syria and Iran: Diplomatic Alliance and Power Politics in the Middle East*. London and New York: I. B. Tauris.
- Halawi, Majed [1992] *A Lebanon Defied: Musa al-Sadr and the Shi’a Community*. Boulder, CO:

- Westview Press.
- Hamizrachi, Beate [1988] *The Emergence of the South Lebanon Security Belt: Major Saad Haddad and the Ties with Israel, 1975-1982*. New York: Praeger.
- Hamzeh, A. Nizar [1993] "Lebanon's Hizballah: From Islamic Revolution to Parliamentary Accommodation," *Third World Quarterly*, Vol. 14, No. 2 (Spring), pp. 321-337.
- [2004] *In the Path of Hizbullah*. New York: Syracuse University Press.
- Hitti, Nassif [1993] "Lebanon in Iran's Foreign Policy," Hooshang Amirahmadi and Nader Entessar eds., *Iran and the Arab World*. Basingstoke: Macmillan, pp. 180-197.
- al-Ḥusaynī, Sharīf [1986] "Ḥizb Allāh: Ḥaraka 'Askariya am Siyāsīya am Dīniya?," *al-Shirā*, No. 299 (March 17), pp. 14-21.
- Ilyās, Salīm ed. [2006a] *Mawsū'a al-Muqāwama al-Lubnāniya, Hizb Allāh bi-Qiyāda Samāha al-Sayyid Hasan Naṣr Allāh: Tārīkh al-Širā al-Lubnānī al-Isrā'īlī*, 12 vols. Beirut: al-Markaz al-Thaqāfī al-Lubnānī.
- [2006b] *Mawsū'a Afwāj al-Muqāwama al-Lubnāniya*, 10 vols. Beirut: al-Markaz al-Thaqāfī al-Lubnānī.
- ‘Imād, ‘Abd al-Ghannī [2006] *al-Ḥarakāt al-Islāmīya fī Lubnān: Ishkālīya al-Dīn wa al-Siyāsa fī Mujtama' Mutanawwī*, Beirut: Dar al-Talī'a.
- Jabar, Faleh [2003] *The Shi'ite Movement in Iraq*. London: Saqi.
- Jaber, Hala [1997] *Hezbollah: Born with a Vengeance*. New York: Columbia University Press.
- Khājim, ‘Alī [n.d.] *Tajammu' al-'Ulamā al-Muslimīn fī Lubnān: Tajriba wa Namūzaj* (<http://www.tajamo.org/>).
- al-Kūranī, ‘Alī [1986] *Tarīqa Hizb Allāh fī al-'Amal al-Islāmī*. Beirut: Maktab al-‘Ilām al-Islāmī.
- Maasri, Zeina [2009] *Off the Wall: Political Posters of the Lebanese Civil War*. London and New York: I. B. Tauris.
- al-Madīnī, Tawfīq [1999] *Amal wa Hizb Allāh: Fī Ḥalba al-Mujābahāt al-Maḥallīya wa al-Iqlīmīya*. Beirut: al-Aḥālī.
- Mallat, Chibli [1988] "Shi'i Thought from the South of Lebanon," *Papers on Lebanon 7*. Oxford: Centre for Lebanese Studies.
- [1993] *The Renewal of Islamic Law: Muhammad Baqer as-Sadr, Najaf, and the Shi'i International*. Cambridge and London: Cambridge University Press.
- Markaz al-'Arabī li-l-Ma'lūmāt – al-Safīr [2006a] *Mawsū'a al-Aḥzāb al-Lubnāniya*. 10 vols. Beirut: Editio International.
- [2006b] *Hizb Allāh: al-Muqāwama wa al-Taḥrīr*. 12 vols. Beirut: Editio International.
- al-Mūsawī, Aḥmad [2000] "Man Antum?...Ḥizb Allāh," *al-Shirā*, No. 926 (April 10), pp. 22-29.
- Mustafā, Amīn [2003] *al-Muqāwama fī Lubnān 1948-2000*. Beirut: Dār al-Hādī.
- NBN [2003] "Aḥzāb Lubnān: Hizb Allāh: al-Juz' al-Awwal (1979-1989)" (directed by Farīd 'Asāf, broadcasted on July 21, 2002), NBN, "Aḥzāb Lubnān: 1982-2002," Beirut: NBN (DVD).
- Norton, Augustus Richard [1987] *Amal and the Shi'a: Struggle for the Soul of Lebanon*. Austin, TX: Texas University Press.
- [1998] "Hizballah: Radicalism to Pragmatism," *Middle East Policy*, Vol. 5, No. 4 (January), pp.

- 147-158.
- Qāsim, Na'im [2008] *Ḥizb Allāh: al-Minhaj, al-Tajriba, al-Mustaqbal*. 4th edition. Beirut: Dār al-Hādī.
- Qassem, Naim [2005] *Hizbullah: The Story from Within*. London: Saqi.
- Ranstorp, Magnus [1994] "Hizbollah's Command Leadership: Its Structure, Decision-Making and Relationship with Iranian Clergy and Institutions," *Terrorism and Political Violence*, Vol. 6, No. 3 (Autumn), pp. 303-339.
- [1997] *Hiz'Allah in Lebanon: The Politics of the Western Hostage Crisis*. New York: St. Martin's Press.
- Robins, Philip [1990] "Iraq: Revolutionary Threats and Regime Responses," in John L. Esposito eds, *The Iranian Revolution: Its Global Impact*. Miami, FL: Florida International University Press, pp. 83-99.
- Rosiny, Stephan [2000] *Shi'a Publishing in Lebanon: With Special Reference to Islamic and Islamist Publications*. Berlin: Verl. Das Arab. Buch.
- Sankari, Jamal [2005] *Fadlallah: The Making of a Radical Shi'ites Leader*. London: Saqi.
- Seale, Patrick [1989] *Asad of Syria: The Struggle for the Middle East*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Shanahan, Rodger [2005a] *The Shi'a of Lebanon: Clans, Parties and Clerics*. London and New York: I. B. Tauris.
- Shaery-Eisenlohr, Roschanack [2008] *Shi'ites Lebanon: Transnational Religion and the Making of National Identities*. New York: Columbia University Press.
- Shapira, Shimon [1988] "The Origins of Hizbullah," *Jerusalem Quarterly*, No. 46 (Spring), pp. 116-125.
- Sharāra, Waḍḍāh [2007] *Dawla Ḥizb Allāh: Lubnān Mujtama'an Islāmīyan*. 5th edition. Beirut: Dār al-Nahār.
- Shidyāq, 'Imād [2006] *al-Muqāwama wa Sayyid-hā Ḥasan Naṣr Allāh*. Beirut: al-Maktaba al-Hadātha.
- Smit, Fernand [2000] *The Battle for South Lebanon: The Radicalization of Lebanon's Shi'ites 1982-1985*. Amsterdam: Bulaaq.
- Suechika, Kota [2000] "Rethinking Hizballah in Postwar Lebanon: Transformation of an Islamic Organisation," 『日本中東学会年報』第15号, 259～314ページ。
- Zisser, Eyal [1997] "Hizballah in Lebanon: At the Crossroads," Bruce Maddy-Weitzman and Efraim Inbar eds., *Religious Radicalism in the Greater Middle East*. London: Franc Cass, pp. 90-110.

(末近 浩太, 立命館大学国際関係学部准教授)

“Resistance meets Revolution (1): The Emergence of Hizballah (1982-85)”

It not until the mid 1990s that Lebanon's Hizballah (The Party of God) was established as a research subject. After the end of the Lebanese civil war, Hizballah, which originated in the early 1980s as an armed resistance group against the Israeli occupation, determined to join the first post-war parliamentary elections and thus transformed itself from a revolutionary Islamist organization into a legitimate Lebanese political party. This transformation attracted considerable attention among analysts and watchers as well as policy makers.

However, while attention has been paid to Hizballah's new face as a political party, the “pre-history” of the party has not been studied for a long time. In fact, due to highly limited availability of reliable sources of information, only a few scholars have tackled Hizballah's “prehistory” by focusing on the question “Why and how did they emerge and develop in the 1980s?” Most of these studies were published in the late 1980s when very few primary sources were available. However, thanks to their recent transformation into a legitimate party, it has become less difficult to access Hizballah's information today. This fact does not legitimize the ongoing ignorance of the “prehistory” as a research topic.

Accordingly, this paper will explore why and how Hizballah emerged between 1982 and 1985 particularly by using the primary sources mainly published and circulated by them. The aim of this paper is not only to fill a blank in the study of Hizballah, but also to reconsider the question “What is Hizballah?” This question has been a focal point of the worldwide political discourse on the dichotomy concerning Islamists – terrorism vs. resistance? While the US administration designates Hizballah as an international terrorist group with global reach, almost all of the Middle Eastern states claim that they are a resistance group countering illegitimate aggression and occupation in Lebanon. In this sense, to reconsider the “prehistory” of Hizballah is not only a question of history but also of contemporary international politics.

(SUECHIKA, Kota, Associate Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)